服部廃寺

1997年 3月

岡山県長船町教育委員会

序

長船町服部にあります服部廃寺は、平成３年３月、仮設道路工事中に礎石が発見されたことから緊急の発掘調査を行い、金堂の礎石のほか須弥壇の存在が明らかとなり注目を集めた遺跡であります。

長船町教育委員会では、平成４年度より平成８年度までの５年間、国より国宝重要文化財等保存整備費補助金の交付を受け、服部廃寺の発掘調査を実施してまいりました。この調査は、当寺跡周辺での開発が増加したのに伴い、この重要な遺跡の規模や内容を確認し、今後の遺跡保護の基礎資料を作成することを目的にしたものであります。

５年間の発掘調査の結果、服部廃寺は、今から約1300年前の白鳳時代に建立され、その規模は、約150m四方にも及ぶ大規模な寺院であることがわかりました。その中にある金堂は、全国的にも報告例の少ない須弥壇が存在することがわかりました。また、講堂の基壇は、東西約32.7m、南北約18mの大規模なものでした。いずれも極めて良好な保存状態を保っていました。

本書は、この５年間の発掘調査成果を１冊にまとめたものであります。本書が服部廃寺の基礎資料としてばかりでなく、広く古代吉備文化の解明に役立つことを願うものであります。

最後になりましたが、調査にご理解とご協力をいただいた土地所有者の方々をはじめ、調査にあたりご指導を賜った指導委員の先生方や関係機関各位、そして調査に直接従事していただいた方々に対し心よりお礼申し上げます。

平成９年３月

長船町教育委員会
教育長　榎本大一

例　言

1．本書は、長船町教育委員会が平成４年度から平成８年度まで発掘調査を実施した服部廃寺の発掘調書査報告書である。

2．本書に収録した発掘調査は、文化庁の担当調査官の指導、助言を受けつつ、国庫補助事業として行ったものの他に町単独事業で実施したものについても一部収録した。

3．調査地は、岡山県邑久郡長船町服部丸山である。

4．発掘調査にあたっては服部廃寺跡発掘調査指導委員会を設け、近藤義郎，水内昌康，鎌木義昌，葛原克人，臼井洋輔，柳瀬昭彦，高畑知功の各氏に委員を委嘱した。指導委員各位からは終始有益な指導と助言をいただいた。記して深く感謝の意を表します。

5．発掘調査は、平成４年度から平成７年度まで実施した。平成８年度は遺物等を整理し、発掘調査報告書の作成等を行った。

6．発掘調査は、国から国宝重要文化財等保存整備費補助金の交付を受けて実施した。年度別の事業費は下記のとおりである。

年　度	事　業　費	国庫補助金	長船町負担金
平成４年度	3,500,000円	1,750,000円	1,750,000円
平成５年度	2,000,000円	1,000,000円	1,000,000円
平成６年度	3,000,000円	1,500,000円	1,500,000円
平成７年度	2,700,000円	1,350,000円	1,350,000円
平成８年度	2,000,000円	1,000,000円	1,000,000円
計	13,200,000円	6,600,000円	6,600,000円

7．本書をまとめるにあたっては、以下の方々のご教示を得た。記して感謝の意を表します。

安間拓巳・石田容子・伊藤　晃・宇垣匡雅・氏平昭則・岡田　博・岡本寛久・尾上元規
亀田修一・亀山行雄・小西通雄・駒井正明・澤見　浩・清水竜太・高橋　護・武田恭彰
長岡　甫・平井　勝・平井泰男・平岡正宏・廣岡孝信・古瀬清秀・間壁葭子・松下正司
森　宏之・山本悦世・横山　定　（五十音順・敬称略）

8．本書の遺物の写真撮影は、大谷博志が行った。

9．本書に使用した図面のトレースおよび拓本についてについては、池畠敬子、茶畑康代、山田　薫の協力を得た。

10．本書に使用した方位は、第５図以外はすべて真北である。

11．本書に使用したレベルは第６・７図以外はすべて海抜高である。

12．本書に掲載した第２図周辺の遺跡は、建設省国土地理院発行の25,000分の１地形図（備前瀬戸・片上）を貼り合わせて縮小、加筆したものである。図の縮尺は各図に付している。

13．本書の執筆者は、池田浩（長船町教育委員会）、大谷博志（同）、杉山一雄（岡山県古代吉備文化財センター）である。文責はそれぞれの文末に明記した。

14．本書の編集は、長船町教育委員会社会教育課が行い、実務を池田と大谷が担当した。

15．発掘調査で出土した遺物及び実測図・写真等は、長船町中央公民館と備前長船博物館に保管している。

本 文 目 次

第1章　位置と周辺の遺跡 …… 1
　第1節　位　　置 …… 1
　第2節　周辺の遺跡 …… 1
第2章　発掘調査の経過 …… 5
　第1節　概　　要 …… 5
　第2節　調査組織 …… 8
第3章　調査区の概要 …… 9
第4章　遺　　構 …… 15
　第1節　主要伽藍 …… 15
　第2節　その他の遺構 …… 17
第5章　遺　　物 …… 21
　第1節　瓦　　類 …… 21
　第2節　土 器 類 …… 25
　第3節　その他の遺物 …… 26
第6章　考　　察 …… 27
　第1節　伽藍配置と規模 …… 27
　第2節　服部廃寺の変遷 …… 28
　第3節　まとめにかえて …… 30
　別　　表 …… 31

図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 1
第２図　周辺の遺跡（１／50000） …… 2
第３図　講堂復元模式図（１／200） …… 20
第４図　トレンチ配置図（１／1000） …… 37
第５図　金堂平面図（１／150） …… 38
第６図　北トレンチ東壁断面図（１／50） …… 38
第７図　西トレンチ北壁断面図（１／50） …… 38
第８図　１トレンチ上層遺構平面図（１／100） …… 39
第９図　中世土器出土平面・断面図（１／50） …… 39
第10図　瓦組遺構平面・断面図（１／50） …… 39
第11図　土壙１（埋甕）平面・断面図（１／50） …… 39
第12図　井戸１平面・断面図（１／50） …… 39
第13図　１トレンチ下層遺構平面図（１／100） …… 39
第14図　講堂基壇東端平面図（１／100） …… 39
第15図　講堂基壇東端断面図（１／50） …… 39
第16図　２トレンチ平面図（１／100） …… 41
第17図　土壙２　平面・断面図（１／50） …… 41
第18図　２トレンチサブトレンチ南壁断面図（１／50） …… 41
第19図　３トレンチ平面図（１／100） …… 42
第20図　３トレンチ北壁断面図（１／50） …… 42
第21図　15トレンチ平面・断面図（１／50） …… 43
第22図　５・８・10・18トレンチ平面図（１／100） …… 44
第23図　鍛冶炉群平面図（１／50） …… 44
第24図　５トレンチ東壁および北壁断面図（１／50） …… 45
第25図　10トレンチ南壁断面図（１／50） …… 45
第26図　18トレンチ東壁および南壁断面図（１／50） …… 46
第27図　８トレンチ南壁および西壁断面図（１／50） …… 46
第28図　29トレンチ平面図（１／100） …… 47
第29図　７トレンチ平面図（１／100） …… 47
第30図　９トレンチ平面図（１／100） …… 47
第31図　６トレンチ平面図（１／100） …… 47
第32図　16トレンチ平面図（１／100） …… 47
第33図　16トレンチ西壁断面図（１／50） …… 48
第34図　29トレンチ南壁断面図（１／50） …… 48
第35図　29トレンチ西壁断面図（１／50） …… 48

第36図　7トレンチ北壁断面図（1／50）…… 49
第37図　9トレンチ北壁断面図（1／50）…… 49
第38図　9トレンチ南壁断面図（1／50）…… 49
第39図　11・20・27トレンチ平面図（1／100）…… 50
第40図　11トレンチ南壁断面図（1／50）…… 51
第41図　20トレンチ東壁断面図（1／50）…… 51
第42図　27トレンチ南壁断面図（1／50）…… 51
第43図　19トレンチ平面図（1／100）…… 52
第44図　21トレンチ平面図（1／100）…… 52
第45図　17・25トレンチ平面図（1／100）…… 52
第46図　4トレンチ平面図（1／100）…… 52
第47図　22トレンチ平面図（1／100）…… 52
第48図　19トレンチ南壁断面図（1／50）…… 53
第49図　21トレンチ北壁断面図（1／50）…… 53
第50図　17トレンチ西壁断面図（1／50）…… 54
第51図　22トレンチ南壁断面図（1／50）…… 54
第52図　4トレンチ西壁および南壁断面図（1／50）…… 55
第53図　24トレンチ東壁断面図（1／50）…… 56
第54図　26トレンチ北壁断面図（1／50）…… 56
第55図　30トレンチ西壁および北壁断面図（1／50）…… 56
第56図　土壙3　平面・断面図（1／50）…… 57
第57図　鍛冶炉4　平面・断面図（1／50）…… 57
第58図　鍛冶炉7　平面・断面図（1／50）…… 57
第59図　軒丸瓦（1）…… 58
第60図　軒丸瓦（2）…… 59
第61図　軒丸瓦（3）…… 60
第62図　軒平瓦（1）…… 61
第63図　軒平瓦（2）…… 62
第64図　軒平瓦（3）…… 63
第65図　軒平瓦（4）…… 64
第66図　丸瓦（1）…… 65
第67図　丸瓦（2）…… 66
第68図　丸瓦（3）…… 67
第69図　丸瓦（4）…… 68
第70図　平瓦（1）…… 69
第71図　平瓦（2）…… 70
第72図　平瓦（3）…… 71
第73図　塼 …… 72

第74図　鴟尾（1）…… 73
第75図　鴟尾（2）・鬼瓦 …… 74
第76図　瓦類タタキの原体（1）（1／2）…… 75
第77図　瓦類タタキの原体（2）（1／2）…… 76
第78図　遺構に伴う土器（1）（1／4）…… 77
第79図　遺構に伴う土器（2）（1／4）…… 78
第80図　遺構に伴わない土器（1）（1／4）…… 78
第81図　遺構に伴わない土器（2）（1／4）…… 79
第82図　その他の遺物（1／3、1／1、1／2）…… 80

図　版　目　次

図版1　服部廃寺近景（昭和40年頃）（西から）…… 81
図版2　服部廃寺近景（平成8年）（西から）…… 81
図版3　金堂礎石検出状況（東から）…… 81
図版4　1トレンチ講堂基壇北東瓦組遺構（西から）…… 82
図版5　1トレンチ講堂基壇南東瓦溜まり1（南から）…… 82
図版6　1トレンチ井戸1（南から）…… 82
図版7　2トレンチ土壙2（東から）…… 83
図版8　3トレンチ瓦溜まり検出状況（東から）…… 83
図版9　3トレンチ金堂西端基壇地覆石検出状況（西から）…… 83
図版10　4トレンチ完掘状況（南から）…… 84
図版11　4トレンチ土壙3（北から）…… 84
図版12　4トレンチ土壙4（西から）…… 84
図版13　5トレンチ講堂基壇南西完掘状況（南から）…… 85
図版14　5トレンチ鍛冶炉群検出状況（東から）…… 85
図版15　5トレンチ鍛冶炉3検出状況（東から）…… 85
図版16　5トレンチ鍛冶炉4断面（南東から）…… 86
図版17　5トレンチ鍛冶炉7完掘状況（東から）…… 86
図版18　6トレンチ西壁断面（東から）…… 86
図版19　7トレンチ築地完掘状況（西から）…… 87
図版20　8トレンチ西回廊西壁断面（東から）…… 87
図版21　9トレンチ完掘状況（東から）…… 87
図版22　10トレンチ南壁断面（北から）…… 88
図版23　11・12トレンチ西側建物検出状況（東から）…… 88
図版24　15トレンチ金堂階段完掘状況（南から）…… 89
図版25　16トレンチ完掘状況（北から）…… 89
図版26　17トレンチ完掘状況（北から）…… 89

図版27　18トレンチ講堂基壇北西完掘状況（西から）…… 90
図版28　19トレンチ完掘状況（北東から）…… 90
図版29　20トレンチ西側建物完掘状況（北から）…… 90
図版30　21トレンチ溝完掘状況（南東から）…… 91
図版31　22トレンチ版築検出状況（北から）…… 91
図版32　23トレンチ完掘状況（東から）…… 91
図版33　24トレンチ完掘状況（北西から）…… 92
図版34　25トレンチ完掘状況（北から）…… 92
図版35　26トレンチ完掘状況（西から）…… 92
図版36　27トレンチ西側建物完掘状況（北西から）…… 93
図版37　27トレンチ瓦溜まり（北東から）…… 93
図版38　28トレンチ完掘状況（東から）…… 93
図版39　28トレンチ南壁断面（北西から）…… 94
図版40　29トレンチ築地南壁断面（北から）…… 94
図版41　30トレンチ完掘状況（東から）…… 94
図版42　軒丸瓦（1）（1／3）…… 95
図版43　軒丸瓦（2）（1／3）…… 96
図版44　軒平瓦（1／3）…… 97
図版45　鴟尾・鬼瓦（1／3）…… 98
図版46　遺構に伴う土器（1）（1／3）…… 99
図版47　遺構に伴う土器（2）（1／3）……100
図版48　遺構に伴わない土器（1）（1／3）……101
図版49　遺構に伴わない土器（2）（1／3）……102
図版50　その他の遺物（2／3・1／2）……103

第1章　位置と周辺の遺跡

第1節　位　　置

服部廃寺は、岡山県邑久郡長船町服部・丸山に所在する。

岡山県三大河川のひとつ吉井川は、兵庫県に接した岡山県東北部の中国山地に源を発し、津山盆地を経て南流し、瀬戸内海へ注いでいる。この吉井川は、熊山山塊につき当たって大きく蛇行しながら岡山市と邑久郡の境界あたりで川幅が広くなり流れも緩やかになる。

吉井川下流の左岸に位置する長船町から邑久町一帯は、肥沃な沖積平野が広がり、県内でも屈指の穀倉地帯となっており、長船町域の東部では今でもN-25°-Eで条里の跡が残る。この平野部のほぼ中央に甲山、高砂山、桂山の独立丘陵が所在し、さらに東方には高山、広高山、四辻山の山々が連なって長船町と邑久町が境を接している。

また、長船町の中央部北では、条里跡に沿って備前市と接しているが北東部では標高約300mの西大平山、東大平山をはじめ、高松山の山々が連なって備前市と境を接している。西は吉井川をはさんで、北西部で赤磐郡瀬戸町と南西部で岡山市とそれぞれ接している。

服部廃寺に近接して建設された県道西大寺・備前線を北へ進めば約1.5kmで国道2号線に達する。そこを右折して東へ進めば約7kmで備前市片上、左折して西へ向かえば約23kmで岡山市の中心部に達する。県道を南へ進めば約6kmで邑久町尾張である。さらにそこから西へ約7.5kmで岡山市西大寺に、東へ約11kmで牛窓町に達する。

服部廃寺は、長船町の北西部に位置し、寺域の北が備前市高山から伸びた天寺山の低丘陵に接し、寺域の東が花光寺山古墳の所在する低丘陵に接している。

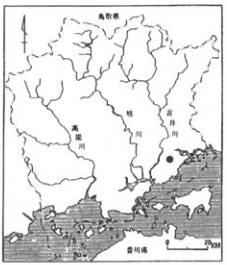
後述する金堂・講堂のほぼ中軸線上で、金堂基壇南端から南へ約32mに位置するポイント（S-14）が、北緯34°42′24″、東経134°06′45″である。

第2節　周辺の遺跡

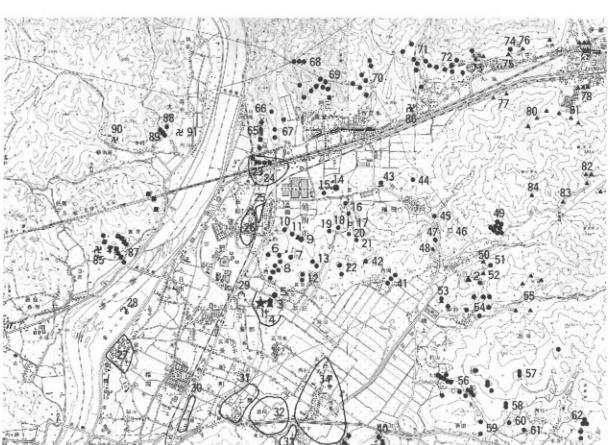
服部廃寺周辺には、旧石器時代以降数多くの遺跡が知られている。

長船町西須恵・広高山山頂の広高山遺跡からは、ナイフ形石器9点が採集されている（注1）。昭和56年町営グランド建設に伴い発掘調査を実施した長船町土師・宮下に所在した木鍋山遺跡では、出土したサヌカイト片の中に旧石器が含まれている。また、昭和58年は場整備事業に伴い発掘調査を実施した西須恵・西谷遺跡（注2）ではナイフ形石器2点、服部廃寺の調査ではナイフ形石器1点が出土している。

長船町内において縄文時代の明確な遺跡は確認されてい



第1図　遺跡位置図



1．服部廃寺　2．竜土池窯跡　3．花光寺山古墳　4．丸山遺跡　5．新庄天神山古墳　6．日田山古墳群
7．高山古墳　8．上の山古墳群　9．長尾山古墳　10．畠田大満宮宮山古墳　11．秋寂天神社古墳　12．地神山古墳群
13．荒神山古墳群　14．鶴山丸山古墳　15．小丸山古墳　16．宝満坂古墳群　17．寺奥遺跡（蓮華文軒丸・褐目平瓦採集）
18．宮山東古墳　19．宮山古墳　20．宝満坂3号古墳　21．総南奥1号古墳　22．光山古墳群　23．船山古墳
24．船山遺跡　25．長船東遺跡　26．長船西遺跡　27．福岡遺跡　28．福岡城址　29．丸山城址
30．土師細工原遺跡　31．土師遺跡　32．土師東遺跡　33．木綿山遺跡　34．福里遺跡　35．甲山古墳群
36．土師茶臼山古墳　37．土師茶臼山古墳群　38．越古墳群　39．牛文茶臼山古墳　40．小茶臼山古墳　41．西岡古墳群
42．黄金山古墳　43．新羅古墳　44．小屋谷散布地　45．宮ノ峠（天狗）古墳　46．配石遺構　47．宮ノ峠古墳
48．宮ノ峠窯跡　49．西大平山古墳群　50．正伝名池窯跡　51．正伝名池古墳　52．新池窯跡　53．油杉山古墳
54．油杉山古墳群　55．油杉窯跡群　56．大塚古墳群　57．堂法山古墳群　58．山堂古墳群　59．向山古墳群
60．南浦古墳群　61．飯井山崎古墳　62．飯井東谷古墳群　63．宮崎古墳群　64．比丘尼岩古墳群　65．坂根古墳群
66．坂根竜神様　67．間山古墳群　68．塚の本古墳群　69．山根古墳群　70．奥谷古墳群　71．大滝道古墳群
72．大内古墳群　73．大内東山窯跡　74．二ツ塚古墳　75．稲荷山窯跡　76．西の山窯跡　77．大ケ池南窯跡
78．南大窯跡　79．北大窯跡　80．福田越窯跡　81．胡耶山窯跡　82．伊坂越窯跡　83．福田一の谷窯跡
84．一の谷窯跡　85．吉井廃寺跡　86．善覚廃寺跡　87．吉井古墳群　88．山伏の墓古墳　89．内山古墳群
90．大牡寺院跡　91．香鎮寺跡

第２図　周辺の遺跡（縮尺 1/50000）

ないが、東須恵・島遺跡や西須恵の丘陵裾部ではこの時期のものとみられる石鏃や石匕を採集している。服部廃寺に隣接する備前市新庄では、縄文後期の土器片が採集されているが、今回の調査でも後期の土器片が1点出土している。

弥生時代になると遺跡の数は増加する。長船町に隣接する邑久町の門田貝塚（注3）やその周辺では、前期前葉から集落が形成されるが、服部廃寺周辺では、遺跡の北に位置し備前市香登から長船町船山にかけてまたがる、前期後半の船山遺跡（注4）が今のところ最も古い遺跡である。服部廃寺の南に位置する木鍋山遺跡では、中期から後期末の竪穴住居址が15棟以上検出されている。また、平成4年に道路工事に先立ち発掘調査を実施した長船西遺跡・的場地点では、後期後半の竪穴住居址等を検出した。このほか、昭和59年から昭和61年にかけて実施した遺跡詳細分布調査（注5）において、丘陵周辺の長船東遺跡、土師細工原遺跡、土師遺跡、福里遺跡で弥生時代後期以降の遺物が出土しており、服部廃寺の立地する一帯も弥生時代から古墳時代の遺物等が採集された丸山遺跡の範囲内にある。今回の調査でも後期以降の竪穴住居址を検出した。このように、長船町内における弥生時代の遺跡の知見も徐々に蓄積されつつある。

古墳時代になると丘陵の頂部や先端に前方後円墳が築造されている。服部廃寺周辺は、前期の前方後円墳や首長墓級の大型円墳が比較的多く存在する地域である。遺跡の北の高山山頂にある全長約68mの前方後円墳・長尾山古墳（注6）では、器台形埴輪片が採集されており、この地域で最古の前方後円墳と考えられている。それに続いて全長約120mの前方後円墳とも直径約40mの円墳ともいわれる新庄天神山古墳（注7）、全長約100mの前方後円墳・化光寺山古墳（注8）、東西径約45m、南北径約54mで31面にもおよぶ鏡を出土した鶴山丸山古墳（注9）などの首長墓級の古墳が築造される。これ以降、服部廃寺に近接する地域では、6世紀代の船山古墳が築造されるまで首長墓級の古墳はみられない。この間の古墳としては、長船町内の築山古墳（注10）、牛文茶臼山古墳（注11）、上師茶臼山古墳（注12）、油杉山古墳（注13）などが知られている。

首長墓級古墳とともに、低墳丘の小古墳が服部廃寺周辺でも数多く築造されている。遺跡の北では備前市新庄から福田にかけての丘陵、および熊山の西南部に密集している。南では、土師茶臼山古墳の所在する丘陵を中心とした一帯、東は磯上・油杉から大塚にかけての一帯に築造されている。これらは内部主体に箱式石棺や竪穴式石室をもつ前期のものと、内部主体に横穴式石室をもつ後期のものに分けられる。概ね前期のものが丘陵頂部や尾根上に築造されているのに対し、後期のものが丘陵裾部に築造されており、立地を異にしている。町域の東に位置する桂山では100基以上の古墳が確認されており、一大古墳群を形成している。分布調査では10基以上の古墳の横穴式石室から陶棺片を採集している。また、長船町史編纂事業にともない測量調査を実施した大塚古墳群では、横穴式石室内に組合せ式箱式石棺が複数埋葬されていることが確認されている。

古墳とともにこの地域の遺跡で特筆しなければならない遺跡として、備前市と邑久郡の東西約8km、南北約9kmの範囲に、約120基（注14）にもおよぶと推定される窯跡が分布する邑久古窯址群がある。

長船町内では現在までに約40箇所の窯跡を確認しているが、中でも木鍋山1号窯（注15）は発掘調査で発見されたもので、出土遺物によりおよそ6世紀中頃と考えられ、現在までに確認されている邑久古窯址群の窯跡では最古のものである。6世紀末から7世紀にかけて長船町西須恵地区で爆発的に増加した窯は、牛窓町寒風古窯跡群（注16）周辺へと拡大していく。奈良時代には備前市佐山から長

船町東須恵地区、邑久町福谷地区へと移動する。長船町磯上・山田の産土池窯跡は、服部廃寺の創建時の瓦窯（注17）として知られている。その後、平安時代になると急速に減少し、新たに長船町磯上・油杉地区で窯跡が確認されている。このように窯跡の移動が邑久郡内に限られることから、律令体制強化による生産の統制が指摘されている（注18）。

飛鳥時代末から白鳳時代にかけて、地方寺院の建立が盛んになるが、旧邑久郡内においても服部廃寺のほか2古代寺院が知られている。須恵廃寺は、長船町西須恵・寺村に所在し、確認調査の結果、2棟の建物基壇を確認している。採集された瓦（注19）から備前地方で最も古いと考えられている。香登廃寺（注20）は、現在の備前市大内に所在するが、776（天平神護2）年以前、同地は邑久郡に含まれており、その後、藤野郡（後の和気郡）に編入された。複弁8葉蓮華文軒丸瓦が出土している。いずれも岡山県東南部を代表する著名寺院跡である。

中世になると前時代の須恵器に生産の伝統を継承した備前焼の窯跡が、備前市伊部から熊山南麓地域を中心とする一帯で確認されている。備前焼とともに全国的に知られる備前刀の生産は、平安時代後期以降、古備前や福岡一文字派の刀工によってはじまり、その居住地は吉井川流域とされているが、現在までにこれらに結び付く遺跡は確認されていない。一方、鎌倉時代中期から興る長船派刀工の居住地は、現在の長船町長船にほぼ比定され、長船西遺跡の場地点や同グイグロ地点の発掘調査でも中世のものと推定される鉄滓が出土している。

このように服部廃寺が所在する一帯は、特徴ある重要な遺跡が数多く存在し、吉備国東部域の中枢的な位置を占めていたと考えられる。（池田）

注

注1　安川豊史「広高山採集の石器」『西谷遺跡』長船町教育委員会　1985
注2　福田正継「西谷遺跡」長船町教育委員会　1985
注3　岡田博「門田貝塚」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』55　岡山県教育委員会　1983
注4　田代郁二「船山遺跡発掘調査報告」エヌ・ティー・エヌ東洋ベアリング運動場建設事業埋蔵文化財発掘調査委員会　1985
注5　池田保「長船町埋蔵文化財分布地図」長船町教育委員会　1987
注6　弘田和司・古市秀治・森宏之：岡山県吉井川流域における古墳の展開（上）」『古代吉備』第14集　1992
注7　梅原末治「備前新庄天神山古墳」『近畿地方古墳墓の調査』3　1938
　葛原克人「新庄天神山古墳」『岡山県史　第18巻　考古資料』岡山県　1986
注8　梅原末治「備前行幸村花光寺山古墳」『近畿地方古墳墓の調査』2　1923
　西川宏「花光寺山古墳」『岡山県史　第18巻　考古資料』岡山県　1986
注9　梅原末治「備前和気郡鶴山丸山古墳」『近畿地方古墳墓の調査』3　1938
　西川宏「鶴山丸山古墳」『岡山県史　第18巻　考古資料』岡山県　1986
注10　梅原末治「岡山県下の古墳調査記録」(二)『瀬戸内海研究』第9・10合併号　1957
　西川宏「築山古墳」『岡山県史　第18巻　考古資料』岡山県　1986
注11　梅原末治「岡山県下の古墳調査記録」(二)『瀬戸内海研究』第9・10合併号　1957
　西川宏「牛文茶臼山古墳」『岡山県史　第18巻　考古資料』岡山県　1986
注12　亀田修一「土師茶臼山古墳」『長船町史　史料編（上）考古・古代・中世』長船町　1997
注13　亀田修一「油杉山古墳」『長船町史　史料編（上）考古・古代・中世』長船町　1997
注14　島崎東・山磨康平「須恵器」『吉備の考古学』福武書店　1987
注15　江見正己「大鍋山1号窯」『岡山県史　第18巻　考古資料』岡山県　1986
注16　山磨康平「楽風古窯址群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告27』　岡山県教育委員会　1978
注17　木内昌康「産砂窯跡」『岡山県文化財総合調査報告』21　岡山県教育委員会　1984
注18　西川宏「備前の古窯」『古代の日本』4　角川書店　1970
注19　宇垣匡雅「須恵廃寺採集の瓦」『西谷遺跡』長船町教育委員会　1985
注20　高橋護「香登廃寺」『岡山県大百科事典』（上）　山陽新聞社　1980

第2章　発掘調査の経過

第1節　概　　要

ここに報告する服部廃寺の発掘調査は、平成3年3月に仮設道路工事中に礎石が発見されたことから、町教育委員会が単独で緊急発掘調査を実施したものと、平成4年度から平成8年度（現地調査は平成7年度まで）までの5年間で、国の国宝重要文化財等保存整備費補助金の交付を受けて実施したものである。

服部廃寺の寺域内にあった真言宗の伞部山花光寺は、昭和30年頃より無住となり、荒廃し倒壊のおそれもあり危険な状況であった。昭和63年、檀家により寺は再興されたが、この時、寺の西側の水田は造成された。

同じ頃、服部廃寺の寺域の南に隣接して、特別養護老人ホーム建設が計画された。計画地内も周知の丸山遺跡内であったが、事前の確認調査の結果、遺物、遺構等が発見されなかったため、計画は着工される運びとなった、しかしながら、当時建設予定地の南には幅員約2mの農道があったが、工事用車輛の通行が困難な状況であったため、平成元年2月、県教育庁文化課、町教育委員会および開発業者による協議の結果、北からの仮設道路を敷設することとし、その中で埋蔵文化財保護に関する覚書を交わした。仮設道路敷設地内には、高さ約1mの土壇があり、その上には近世の墓石数基と宝篋印塔があった。仮設道路はこの土壇を迂回して敷設された。

前年、埋蔵文化財保護に関する覚書を交わしていたものの、平成3年3月、業者により土壇上の墓石等が花光寺境内に移転され、無届けのままこの土壇が半分ほど掘削された時点で、礎石が3個発見された。この事実を知った町教育委員会では、直ちに業者に工事の中止を申し入れ、県教育庁文化課と今後の対応を協議し、緊急の発掘調査を実施することとなった。

調査の結果、金堂の礎石11個のほか須弥壇等の遺構を検出し、その保存状態は極めて良好であることが判明した。

町教育委員会では、このような状況の中で緊急に当寺跡の範囲と内容を確認する調査を実施し、その保護のための基礎資料を収集すべきであるとの判断を行ったのである。岡山県教育委員会の指導を得る中で、基礎資料を収集するための最小限度の発掘調査を3年計画で行い、町教育委員会の直営事業とする調査計画を立案した。その後、調査計画は2年間延長され、平成4年度から平成8年度までの5年間となった。現地での発掘調査は、平成4年度から平成7年度までの第1次から第4次までで、平成8年度は出土資料等を整理し、発掘調査報告書を刊行することとなった。　　（池田）

（平成2年度・緊急発掘調査）

平成3年3月15日から3月31日まで発掘調査を実施した。調査地は服部1126番地である。基壇上およびその周辺に東・西・南・北4トレンチを設定した（第5図）。調査の結果、工事中に発見された3個の礎石のほかに、新たに8個の礎石を検出した。これにより、建物は桁行5間・梁間4間で、柱間寸法は、身舎が3m（10尺）の等間隔で、廂の出が2.4m（8尺）、外側の礎石の中心から基壇端までは2.7m（9尺）であることが確認された。

また、身舎には東西7.8m（26尺）、南北4.5m、高さ40cmの須弥壇があったことが確認された。

建物の規模や建物内に須弥壇をもつことなどから、この建物は金堂である可能性が高いと判断した。（池田）

（平成４年度・第１次発掘調査）

発掘調査に先立ち、平成４年８月から平成４年９月まで周辺の地形測量を業者に委託して行った。その後、平成４年10月14日から平成５年２月５日まで発掘調査を実施した。調査地は服部1102・1103・1125・1127番地である。調査総面積262㎡、総事業費3,500,000円。

平成２年度の緊急発掘調査で確認した建物が、ほぼ金堂であることを判断した。周辺の地形の状況から、当初法起寺式伽藍配置を想定して３調査区を設定した。１トレンチは金堂の北東から南北に設定し、講堂の確認を、２トレンチは金堂の東にＬ字形に設定し塔の確認を、３トレンチは金堂の西に東西に設定し、回廊と築地の確認をそれぞれの目的とした。

調査の結果、１トレンチでは、上層で溝、柱穴群、埋甕などの遺構を検出した。また、下層では講堂の礎石のほか、基壇の北端と東端および井戸などの遺構を検出した。

２トレンチでは、東へゆるやかに傾斜する掘り込み地業と方形瓦組遺構等を検出した。

３トレンチでは、金堂西端の基壇化粧の地覆石のほか調査区西端で回廊と推定される版築を確認した。（池田）

（平成５年度・第２次発掘調査）

平成５年９月16日から平成５年12月31日まで発掘調査を実施した。調査地は服部1098・1099・1102・1103・1104・1105・1127－１番地である。調査総面積は229㎡で、総事業費2,000,000円である。

平成５年度は、寺域の範囲確認を主目的とし発掘調査を行い、平成４年度の発掘調査で講堂の位置が確認されたことからその規模と回廊の有無についても確認することとした。また、塔については当初想定していた法起寺式の位置で確認できなかったことから、四天王寺式の可能性も考えられた。そのため、金堂の前面に塔の痕跡が残存しているかどうかも併せて確認することとした。

４トレンチでは、方形瓦組土壙等を検出したが、版築は検出されなかった。

５トレンチでは、講堂基壇の南西部と西回廊、鍛冶炉群を検出した。

６トレンチでは、寺域の北限を区画する施設の位置部と考えられる溝を確認した。

７トレンチでは、築地版築とその雨落ち溝を検出した。

８トレンチでは、講堂の西辺と西回廊を検出した。

９・10トレンチでは、西回廊の版築を確認した。

11トレンチでは、東西７間の建物の方形掘り方をもつ柱穴と寺域の西限を区画する溝を検出した。

12トレンチでは、スラグを含む焼土面を確認した。

13トレンチでは、遺構は確認されなかったが、縄文土器が出土した。

14トレンチは単町費で発掘調査を行った。西側に河道を確認した。（杉山）

（平成６年度・第３次発掘調査）

平成７年２月27日から平成７年３月31日まで発掘調査を実施した。調査地は服部1094・1097・1098・1099・1107－１・1102・1103・1126・1127－１・1128－１番地である。調査総面積は300.82㎡、総事業費3,000,000円。

平成６年度の調査では、令堂基壇の南端を確認するために金堂中軸に添うように15トレンチを、中門を確認するために16トレンチを、南門を確認するために17トレンチを設定した。講堂北西コーナーを確認するために昨年度調査した５トレンチの北側に18トレンチを設定し、東側の回廊の有無を確認するために22トレンチを設定した。昨年度11トレンチで確認した西の寺域を区画する溝の延長を確認するために、北と南にそれぞれ約40mのところへ19トレンチと21トレンチを、同じ11トレンチで確認した東西７間の建物の南北の規模を確認するために20トレンチを設定した。昨年度検出した築地の延長を確認するために７トレンチから南へ15mのところへ23トレンチを設定した。

調査の結果、15トレンチでは、現地表から約1.2m掘り下げた結果、基壇南端を確認することができ、さらに南側で階段と思われる遺構を検出した。16トレンチでは、耕作土直下で古墳時代初頭の竪穴住居を検出したが、寺院に関係すると思われる遺構は確認できなかった。17トレンチでは、耕作土直下で80cm大の方形の柱穴を検出した。18トレンチでは、講堂基壇の北端および西端と礎石の抜き取り穴４個を検出した。19トレンチと21トレンチでは、それぞれ溝を確認することができた。20トレンチでは、北と南にそれぞれ１間分確認できた。22トレンチでは、令堂の基壇東端の延長から東へ15mのところで東西幅約４mの版築と版築の東側で井戸跡を確認した。23トレンチでは、明瞭な版築は確認できなかった。（大谷）

（平成７年度・第４次発掘調査）

平成８年２月19日から平成８年３月31日まで発掘調査を実施した。調査地は服部1094・1098・1099・1100・1101・1106・1130－１番地である。調査総面積は222.97㎡、総事業費2,700,000円。

平成７年度の調査では、寺域の南限を確認するために北限から２町（約200m）の地点に24トレンチを設定した。昨年度、柱穴を検出した17トレンチの隣に寺域を区画する遺構の有無を確認するために25トレンチを設定した。築地の西側で他のところより一段高い地形で雑舎などの有無を確認するために、平坦面の中央部に東西に長く26トレンチを設定した。昨年度に引き続き西側の建物の規模を確認するために、11トレンチに平行するように27トレンチを設定した。西側の寺域を区画する溝が北側で西へ振るため再度確認するために11トレンチと19トレンチの中間地点に設定した。これまでに検出した築地の北限への取り付きを確認するために、29トレンチを設定した。寺域南限を区画する遺構を確認するために、25トレンチの西側に約30mのところへ30トレンチを設定した。寺域東限を区画する遺構を確認するために、31トレンチを設定した。

調査した結果、24トレンチでは、遺構などは検出されなかった。25トレンチでは、耕作土直下より直径約80cmの柱穴を検出したので、さらにトレンチ中央部を西に拡張し調査した。26トレンチでは、耕作土直下より、柱穴を検出した、また現地表面から80cm掘り下げたところまで瓦片が出土した。27トレンチでは、複数の柱穴と瓦溜まりを検出した。28トレンチでは、溝らしきものが確認できた。29トレンチでは、版築と思われる層位と築地の両側に溝を確認した。30トレンチおよび31トレンチでは、遺構などは検出されなかった。（大谷）

第2節　調査組織

今回の発掘調査を行うにあたり服部廃寺跡発掘調査指導委員会を次の通り設置した。

委員会

委員長	長船町教育委員会教育長	榎本大一
調査指導委員	岡山県文化財保護審議会委員	近藤義郎
	同	水内昌康
	同	鎌木義昌（平成4年度）
	岡山県教育庁文化課参事	葛原克人
	岡山県教育庁文化課課長代理	臼井洋輔
	岡山県古代吉備文化財センター調査第二課長	柳瀬昭彦（平成4年度）
	岡山県古代吉備文化財センター調査第一課長	高畑知功（平成5～7年度）

事務局

事務局長	長船町教育委員会教育総務課課長	青山始正（平成4～5年度）
	長船町教育委員会社会教育課課長	盛恒一（平成6年度）
	同	森京一（平成7年度）
事務局次長	長船町教育委員会社会教育課係長	人江章雅（平成4～5年度）
調査担当者	長船町教育委員会学芸員	池田浩
	同	杉山一雄（平成4～5年度）
	同	大谷博志（平成6～7年度）

（大谷）

第３章　調査区の概要

（平成４年度・第１次発掘調査）

１トレンチ（第８～15図・図版４～６）

法起寺式の伽藍配置を想定し、金堂の北東に南北にトレンチを設定し、125㎡を調査したが、中央部をゴミ捨て穴で大きく攪乱されていた。

上層遺構（第８図）としては、中央部で中世頃の幅３m、深さ約1.2mの溝１を検出した。トレンチの北側では、柱穴群と鎌倉時代の溝数条とたわみを１ヶ所、備前焼の甕を用いた埋甕（第11図）を検出した。この甕の埋土には非常に多量の炭が含まれており、火葬墓の可能性が考えられる。また、下層で発見された礎石２個のうち、南側の礎石の上部に瓦組遺構（第10図）を検出した。

トレンチの南側では、基壇の外側に中世の土器類を含んだ瓦溜まりを検出した。瓦溜まりは、部分的にＬ字形に集中しており、建物があったと考えられる。

下層遺構（第13図）としては、礎石２個と礎石の抜き取り穴１ヶ所、基壇の北東隅、井戸１基（第12図）を検出した。礎石は２個とも円形の柱座を造り出している。また、基壇の北東隅では根石１個、円形に組まれた瓦集中地点２ヵ所が認められた。これらの上部に柱が立つと考えられる。しかし、基壇の造成面からは若干浮いているので、直接基壇に伴うかどうかは不明である。また、基壇の北側にはＬ字形に基壇辺に沿って曲がる非常に浅い溝が確認でき、雨落ち溝と考えられる。

基壇の北と東の端は確認できたが、南の端は中層の瓦溜まりとゴミ捨て穴のために不明瞭だが、土層断面の観察から、基壇の南北は約16m（54尺から56尺）で柱間４間で復元できると考えられた。

調査区の北端に半分かかる形で１辺0.9mの方形の木枠の井戸を検出した。検出面から約３m掘り下げたところで、南側の木枠が倒壊しており底まで達しなかった。しかし、その深さのところで平安時代から鎌倉時代の軒瓦１組が出土したことから、それ以前に築かれ使用されていたと考えられる。

遺物として、白鳳期の瓦のほか調査区の南では平安時代から鎌倉時代の蓮華文の軒丸瓦が、北では巴文軒丸瓦が多く出土した。

２トレンチ（第16・17・18図・図版７）

塔の推定値で、金堂の東にＬ字型にトレンチを設定し、70㎡を調査した。

調査区の東端の南北土層断面で版築を確認した（第18図）。この版築は東へ緩やかに傾斜し、旧地表を掘り込んでいた。また、版築内に柱穴が数カ所認められ、版築工事の際の足場を設置した穴と考えられる。

このほか、南北1.4m、東西1.0m、深さ0.4mの方形の土壙に瓦を組んだ状態で瓦溜まり１カ所を検出した。また、調査区のほぼ中央で土壙１基を検出した。

遺物として、白鳳期の瓦が大量に出土している。

３トレンチ（第19・20図・図版８・９）

回廊・築地の推定値で、金堂基壇の西辺に接して東西に調査区を設定し、67㎡を調査した。

調査区の西側、金堂西端から約18mの地点で、東西幅約３mの版築を確認した。調査時点では、寺域の東端からほぼ１町の地点であることから築地と考えたが、２トレンチや第３次発掘調査で、金堂の東側でも金堂・講堂の中軸線からほぼ同じ距離で版築を確認したため、回廊であると考えられる。

また、調査区の東端で金堂西辺の基壇化粧の地覆石列を検出した。

遺物として、金堂に近い瓦溜まりでは、白鳳期の軒丸瓦が出土したほか、側溝内から耳環1点が出土した。（池田）

（平成5年度・第2次発掘調査）

4トレンチ（第46・52図・図版10～12）

門・回廊と、伽藍配置が四天王寺式の場合に塔が存在する可能性があるため、その痕跡の有無を確認することを目的とした。寺院の中軸線と推定される南北道路と、北側丘陵裾から約1町に位置する東西道路の交差する地点の北東部に調査区を設定し、49.6㎡を調査した。遺構は、海抜高約5.5mの面で弥生時代後期から古代の遺構が検出された。寺院造営時のものとしては、土壙2基が見られるのみで版築や瓦溜まりは見られない。また、弥生時代後期の土壙1基と時期不明の炉1基、焼土面3カ所を検出した。

遺物は、古代のものとしては土壙内遺物に多量の瓦が見られるのみで、包含層中からもほとんど出土していない。比較的多く見られる遺物としては、弥生時代後期の土器が上壙内から出土している。また、包含層中からは7世紀前半代の須恵器がまとまってみられる。

5トレンチ（第22・23・24図・図版13～17）

講堂規模の確認と、1トレンチで検出されなかった回廊の有無を確認することを目的とし、基壇南西隅が推定される地点に調査区を設定し、72.3㎡を調査した。

遺構は、講堂基壇の南西隅部と回廊を検出した。基壇上面では礎石抜き取り穴2基、基壇裾では雨落ち溝を確認した。基壇の化粧石の大半は抜き取られていたが、部分的に残存している。このほかに回廊上で営まれた鍛冶炉14基も検出した。これらは鎌倉時代の土器を含んでおり、それが礎石抜き取り穴出土の土器とほぼ同時期であることから講堂の廃絶、縮小に関連した遺構と考えられる。

遺物は、多量の白鳳時代の瓦と奈良時代から中世にかけての土器を多量に出土している。また、鍛冶関連遺物として鞴の羽口・スラグも見られる。

6トレンチ（第31図・図版18）

寺域の北限を画する遺構の確認を目的とし、北側丘陵の斜面南裾に調査区を設定し、5.0㎡を調査した。

遺構は、表土直下から斜面裾に溝1条とそれより南の平坦地にピット1基を検出した。

遺物は、古代の平瓦が少量出土している。

7トレンチ（第29・36図・図版19）

現地形で土塁状の高まりが見られ、寺院に関係する遺構の存在が推定されたため、その性格を確認するために調査区を設定し、12.1㎡を調査した。

遺構は、現地形同様の高まりをもった版築を確認し、その東西の裾に1条づつの溝を検出した。

遺物は、白鳳時代の瓦と7世紀の須恵器が少量出土している。

8トレンチ（第22・27図・図版20）

回廊の南北幅と、回廊の講堂への取り付き状況の確認をすることを目的とし、5トレンチの北側に調査区を設定し、8.8㎡を調査した。

遺構は、講堂基壇の西端線の一部と西回廊の北端線を検出した。講堂基壇は南側では一部化粧石と

思われる石を残しているが、北側は後世の攪乱により残存していない。

遺物は、白鳳時代の瓦が多量に出土している。また、土器も7世紀代を中心として鎌倉時代までの上器が少量出土している。

9トレンチ（第30・37・38図・図版21）

3・7トレンチで確認した築地状版築の相互関係と、それらと回廊との関係を確認することを目的とし、築地状版築の延長線と8トレンチで確認した回廊の延長線の交差する地点に調査区を設定し、23.4㎡を調査した。

遺構は、寺院造営時のものとしては、調査区南側で版築とピット1基を検出した。この版築は調査前には築地と考えていたが、8トレンチの状況から回廊と判断された。また、調査区北側の土層には全く版築が見られず7トレンチで検出した築地と回廊との関係は不明である。このほかに平安時代以降のものとして溝2条を検出した。

遺物は、白鳳時代の瓦が多量に出土していることと、特に室町時代の土器が多く見られる。

10トレンチ（第22・25図・図版22）

3・9トレンチで確認した築地状版築と5トレンチで確認した講堂・回廊の雨落ち溝の残存状況を確認することを目的とし、5トレンチの南端延長線上に調査区を設定し、6.3㎡を調査した。

遺構は、土層確認のみだが3トレンチの築地状版築の延長線上で版築を確認した。これは、調査前は築地と考えていたが、5トレンチの遺構検出状況から回廊と判断される。また、版築の範囲の東側には5トレンチと同様の落ち込みが見られ、これが雨落ち溝にあたると考えられる。版築の西側は後世の削平により不明である。

遺物は、白鳳時代の瓦が多量に出土している。また、土器も奈良時代から室町時代の須恵器、土師器が出上している。

11・12トレンチ（第39・40図・図版23）

現地形で講堂・金堂基壇のある面とは約1m低くなっているが、瓦が採集されることから寺院関連遺構の有無を確認することを目的とし、5トレンチの南端延長線上に調査区を設定した。遺物の取上の都合から溝の西肩部から東側を11トレンチ、西側を12トレンチとし、計46.7㎡を調査した。

遺構は11トレンチでは奈良時代の溝1条と方形の掘り方をもつ柱穴列1列を検出した。これは建物と考えられるが南北の状況は不明である。12トレンチでは炭とスラグを含む焼土面2カ所を検出した。

遺物は、11トレンチから白鳳時代の瓦が少量と、奈良時代を主体とした須恵器、土師器などが溝の埋土を中心として多量に出上している。また、黄色基盤層上面で縄文時代後期前半の土器が1点出土した。12トレンチでは7～8世紀の須恵器、土師器が出上している。

13トレンチ

11トレンチで検出した柱列の範囲確認と土層の確認をすることを目的とし、5トレンチの南端延長線上で11トレンチの東に調査区を設定し、4.8㎡を調査した。

遺構は、土層観察のみで性格は不明確だが、土壙状の大型の掘り込みやピット状の小型の掘り込みを6カ所確認した。いずれも時期を示す遺物が含まれていない。

遺物は、時期不明の土器片がわずかに出土している。

14トレンチ

12トレンチでスラグを含む焼土面が検出されたことから、その範囲を確認することを目的とし、5トレンチの南端延長線上で12トレンチの西に調査区を設定し、3.0㎡を調査した。

遺構・遺物とも確認されなかったが、スラグを含む層が調査区の西へ広がっている。　（杉山）

（平成６年度・第３次発掘調査）

15トレンチ（第21図・図版24）

金堂の中軸から東側に設定し版築を残すように掘り下げたが、上層の方はゴミの廃棄場所となっていたようで近現代の瓦や礫を多く含んでいた。

現地表から約1.2m掘り下げた結果、推定していた基壇南端の外側を瓦片を敷き、その上に３～５cm大の玉砂利を敷いた参道と思われる遺構が確認された。また、金堂基壇に取り付くように続く階段が１段分確認できた。その高さは27cm（９寸）、奥行きは27cm（９寸）である。基段上面までの高さから推測するとその段数は４段となる。基壇端部には、他のトレンチ同様に砂岩製の地覆石列が検出され、その上から階段を築きこの部分の土は堅くよくしまっている。

16トレンチ（第32・33図・図版25）

中門の想定地に設定した。

耕作土直下が遺構面で、竪穴住居址２棟を重複して検出した。住居１（新しい方）は、一辺５mの隅丸方形で、その中央土壙から古墳時代初頭の土師器の壺が出土した。住居２（古い方）は、断面観測によると住居１より一回り小さいと思われるが未掘のため詳細は分からない。その他には、住居１を切る溝３条および柱穴を検出した。柱穴は寺院の遺構に伴うものと考えられるが、明確ではない。

17トレンチ（第40・50図・図版26）

南門を想定して、寺域の北限から１町半の地点に設定した。

耕作土直下で、寺院の遺構と思われる約80×100cmの長方形の土壙２個を検出した。埋土は（暗灰褐色）色であり、柱穴中心間の距離は5.5mである。

18トレンチ（第22・26図・図版27）

講堂の北西コーナーを確認するために設定した。

講堂の基壇の西端・北端を検出した。また、礎石の抜き取り穴４個も検出した。基壇の西、北側では多量の瓦が出土した。さらに、基壇の堀込み地業を西・北側で確認した。礎石の抜き取り穴からの出土遺物は、根石と思われる小礫および摩滅した土師器片と瓦片が少量である。

19トレンチ（第43・48図・図版28）

前年度に寺域を区画すると推定される溝の北への延長を確認するために設定した。

南北を結ぶ線でやや西に振って幅２mと0.4mの溝２条を検出したが、共に寺域を区画する溝とはいいがたい。西側への落ちがあり旧川道の東岸である可能性が強い。

20トレンチ（第39・41図・図版29）

東西７間の建物の南北の規模を確認するために11トレンチに直交するように設定した。

前年度確認した建物の北側と南側へそれぞれ１間分を確認した。北側の柱穴の大きさは40cmの方形であり、その規模から廂の柱穴と推定される。南側の柱穴の大きさは80×100cmの長方形で瓦片と塼が出土した。

21トレンチ（第44・49図・図版30）

前年度に寺域を区画すると推定される溝の南への延長を確認するために設定した。

19トレンチとは逆に南北を結ぶ線より南で東に振って、幅約1.8mの溝と、下層より幅3.5mの溝を検出した。遺物は耕作土直下の包含層から敲質土器片と上層の溝の東側の肩口から軒丸瓦1点が出土した。

22トレンチ（第42・47図・図版31）

東側の回廊、または塔を想定して設定した。

金堂の基壇東端（推定）を南に延長した線から東へ約15mの地点で、東西幅約4mの版築を高さ40cm確認した。これは、2トレンチで確認した掘り込み地業肩口のラインの延長と一致し、回廊の可能性が高い。また、版築の東側で井戸跡（鎌倉時代頃）を確認した。この井戸からは瓦が主に出土した。

23トレンチ（図版32）

築地の延長を確認するために設定した。

版築と思われる層位を検出したが、後世の耕作の影響を受けたものと思われ、明瞭に確認できなかった。（大谷）

（平成7年度・第4次発掘調査）

24トレンチ（第53図・図版33）

旧地名（小字名、花光寺・山崎の境）と現地形が盛上状になっていることから寺域の南限を2町と想定した場合の位置にあたり、遺構などの有無を確認するために設定した。

遺構等は検出されなかった。また、現在盛土状になっているの部分は現代になって行われた用水路の改修が行われた時の残土であることを土地所有者から聞いた。遺物は、土師器小片が少量出土しているがいずれもかなり摩滅している。

25トレンチ（第45図・図版34）

南門及び南限を区画する遺構を確認するために、昨年度柱穴を検出した17トレンチの西隣りを拡張するように設定した。

昨年度検出した柱穴と同様の埋土の柱穴3個を検出した。内1つが調査区境界であるためさらに中央部を西に拡張し調査を行った。柱穴からの出土物は弥生土器の甕および壺の破片が多数出土し、これにより弥生時代後期から終末期の竪穴住居であると思われる。またこれらの遺構が耕作土直下から検出されることから、現代までに寺院創建時の旧地表面はかなり削平されていると思われる。

26トレンチ（第54図・図版35）

築地の西側で、他より一段高い地形で雑舎等の存在が想定されるため平坦面の中央部分に東西に細長く設定した。

耕作土直下より直径50～60cmの柱穴を7つ検出した。そのうち5つはほぼ一直線になるがその性格については不明である。柱穴からの出土遺物は、瓦小片、土師器片、鉄釘1本である。現地表面より1m掘り下げたところ（海抜高約6.0m）で厚さ3～5cmの暗黒灰褐色土の層があり、これより下層では瓦片の出土はないことから寺創建時の地表面であると考えられる。

27トレンチ（第39・42図・図版36・37）

11・20トレンチで確認した建物の規模を確認するために11トレンチの南へ平行するように設定した。

耕作土直下より28トレンチから続く溝1条が検出した。時期は室町中期以降と思われる。現地表より約40cm掘り下げたところ、柱穴と瓦溜まりが検出された。柱穴は11トレンチで検出されたときの一列ではなく、複数列になることから建物は複数棟あるいは、建て替えがあったと推測される。その規模は、南北が一間以上であるが不明である。瓦溜まりの出土物は、主に平瓦でその他には鴟尾片1点、不明瓦片1点、須恵器片などである。摩滅しているものも多くあまり厚い堆積でない。建物の消滅後の廃棄場所と考えられる。

28トレンチ（図版38・39）

19トレンチで確認した溝が寺域を区画する溝とすると、西へ大きく振るため再度確認するために設定した。

幅1.8mの溝を検出したが、この溝は寺域を区画するものでなく11トレンチを通り27トレンチの中央付近へ延びる室町期のものである。西に向かって下がる斜面堆積の土中に少量の鉄滓と焼土が含まれている。8世紀頃の須恵器と土師器の皿が出土している。

29トレンチ（第28・34・35図・図版40）

これまでに検出した築地の北限への取り付きを確認するために設定した。

南北に縦断するサブトレンチで版築と思われる層位を検出したが、竹木の根による影響を受けたようでしまりが悪く一部分しか確認できなかった。地山に取り付くように築かれている。下層で埋土に瓦を含む溝状のものを1条検出した。東西に横断するサブトレンチでは、築地東側の溝を明瞭に確認できたが西側は明瞭に確認できなかった。

30トレンチ（第55図・図版41）

寺域の南限を区画する遺構を確認するために設定した。

後世の地上げにより遺構らしきものは何も確認できなかった。断面観察により現在までに幾度か地上げを行い水田に利用されていたと思われる。

31トレンチ

寺域の東限を区画する遺構を確認するために設定した。

現代の改変と攪乱等により遺構などは確認できなかった。（大谷）

第4章　遺　　構

第1節　主要伽藍

（1）金　堂

平成2年度の緊急調査の結果、礎石11個を検出した。礎石はいずれも花崗岩製で、直径約60cm前後の円形の柱座を作り出しており、中には地覆座を作り出したものもある。調査した4つのトレンチとも礎石の根石は検出されず、西トレンチでは、礎石部分の基壇版築が落ち込んだ状態が確認された（第7図）。なお、根石がないことや礎石の地覆座の方向に規則性を欠くものがあり、再建の可能性があるのではないかとの指摘もある。

その後、花光寺の鐘脱石、服部・丸山地内の灯篭の礎石、および慈眼院本堂（長船町長船）の礎石数個に円形柱座・地覆座を作り出した礎石があることがわかり、服部廃寺金堂、または講堂の礎石がこれらに転用された可能性がある。

礎石の検出状況により、金堂は桁行5間・梁間4間で、柱間寸法は、身舎が3m（10尺）の等間隔で、廂の出が2.4m（8尺）で、外側礎石の中心から基壇端までは2.7m（9尺）であることが確認された。これにより基壇の規模は、東西19.2m（64尺）、南北16.2m（54尺）が想定された。

また、身舎には東西7.8m（26尺）、南北4.5m（15尺）、高さ約40cmの須弥壇があったことが確認された。須弥壇は、黄色のきれいな土で作られている。北側の側面には、塼が1枚立って検出され、塼を立てた須弥壇であった可能性がある。須弥壇自体の調査を行っていないため、鎮壇具等については不明である。

今回、新たに3トレンチ（西端）と15トレンチ（南端）で基壇端の基壇化粧の地覆石を検出した。緊急調査の北トレンチで検出したものと同様、砂岩を多少加工したものが使われていた。いずれも外側にあったと推定される礎石中心からほぼ9尺の位置にあることから、東端は確認していないが、基壇の規模は前記の数値と考えてよさそうである。基壇西では、基壇端部から1.2m（4尺）の位置で、旧地表を約20cm掘り込んだ掘り込み地業を確認した。化粧の地覆石は創建期整地層直上にあり、整地層から基壇上面までは約1mを測る。掘り込み地業の版築を含めるとその高さは1.4mにも及び、礎石上面までではほぼ1.5m（5尺）になる。

基壇南辺の中央部で階段を検出した。検出したのは第1段目のみで、基壇の地覆石の南に約5cmのところに階段の右袖と推定される奥行き約50cmの花崗岩と、袖石の上面と同じ高さで幅約30cm弱で西へ瓦と河原石を配列したものである。造成面から袖石の上面まで約27cm（9寸）であることから、階段の高さを27cm、奥行きを同じく27cmで復元すると4段で基壇上面に達する。また、袖石とみられる石の側辺は、金堂の東から3つ目の礎石の中心とほぼ一致すると推定されることから、階段は金堂の中央に幅3m、奥行き約1mで取り付いていた可能性が高い。階段の南側には、拳大の河原石を敷き詰めた状態が検出され、参道であると考えられる。

なお、基壇の地覆石は確認したものの、基壇化粧については今のところ不明である。しかしながら、金堂基壇周辺のトレンチから拳大の河原石が比較的多く出土することから、乱石積み基壇であった可能性も考えられる。（池田）

（2）講　堂

1・5・8・18トレンチの調査の結果、礎石2個と礎石の抜き取り穴6個を検出した。礎石は、花崗岩製で直径約60cm前後の円形の柱座を作り出している。礎石の抜き取り穴は、いずれも拳大から人頭大の根石が残っていた。南側で検出された2個の抜き取り穴では特に多く残っていた。

基壇の規模は、東西が32.7m（109尺）、南北18m（60尺）であり、その中心軸は金堂のそれと一致し磁北よりやや東に傾き真北に近い。また、金堂の北側の基壇端部から講堂の南側の基壇端部までの距離は16.5m（55尺）である。

1トレンチの礎石の検出状況から講堂は、廂の柱間の寸法が3m（10尺）となることが最初に確認できた。また、身舎の梁行も西側の調査区（5トレンチ・18トレンチ）南端の礎石の抜き取り穴の中心から北端の礎石の抜き取り穴の中心までの距離が13.8mであり廂の柱間が3m（10尺）であるから、身舎の梁行の柱間寸法を3.9m（13尺）の等間隔であることが容易に推測できる。つぎに、東端の礎石の中心から西端の礎石の抜き取り痕の中心までの距離が約29mであり廂の柱間が3m（10尺）であるから、身舎の桁行の柱間寸法を、3.3m（11尺）の等間隔とすると7間と考えることができる。

これらの結果から講堂中央部が未調査ではあるが桁行9間、梁行4間の四面廂建物（第3図）であったと推測される。18トレンチで確認された基壇などから外側の礎石の中心から基壇端部までは、北辺と南辺が2.1m（7尺）、東辺と西辺が1.8m（6尺）であることがうかがえる。

1トレンチで検出した基壇上面の海抜高が約6.7mであり、18トレンチの断面観察から得た整地面の海抜高が約6.3mであるから基壇の高さは約40cmとなる。さらに18トレンチの掘り込み地業の版築を含めると約1mになる。また、1トレンチで検出した基壇上面の北半分に部分的ではあるが厚さ数cmの漆喰を検出している。

講堂基壇南西部で検出された石列が、基壇化粧の石列の一段目で乱石積基壇と考えられるが、ほかのトレンチでは検出することができなかったため断定はできない。

講堂基壇南西隅から北へ約70cmのところから幅6.9m（23尺）の回廊が取り付き西に延びることが確認できたが、東側に延びる回廊の存在は見い出していない。

また、基壇南端から南に約40cmのところに幅約50cm前後の雨落ち溝が看取できる。雨落ち溝は、基壇北東部でも同規模のものを検出しているが、北西部（8・18トレンチ）では検出できなかった。

瓦の出土状況は、各トレンチで異なっている。1トレンチでは、下層は平安時代の瓦が平面的に広がりその中には鎌倉時代のものは見られなかったのに対して、中・上層は巴文の軒丸瓦を使用する時期の瓦が平面的に広がって多量に出土している。5トレンチでは、平面的にまとまった出土は見られなかった。18トレンチでは、基壇の北側及び西側で創建時の瓦を中心とした瓦が重なるように平面的に多量に出土した。

講堂の造営された時期は、周辺で出土した瓦などから7世紀末頃であると考えられ、5トレンチで検出した礎石抜き取り穴から出土している鎌倉時代の土器片からこの時期には創建時の講堂は廃絶したと考えられる。その後に規模を縮小しての再建も考えられるが、中央部分について未調査であるため創建時の身舎の状況も含めて、詳細を明かにすることが課題である。　（大谷）

（3）回　廊

西回廊　3・5・8・9・10トレンチで検出した。講堂南西隅の約70cm北の部分から南寄りに取り

付き、南北幅は約690cm、整地面からの高さは南側では約40cm、北側では10cmを測る。これは北側がさらに30cmの造成がされているためである。また、東西幅については最大324cmを測るが、西側が削平を受けているため詳細は不明である。雨落ち溝は両側の版築縁に設けられている。

回廊の築造過程は、8トレンチの土層観察から確認された。まず、海抜高4.4m以下に回廊の範囲で掘り込み地業を行いその上に10～15cmを一単位として3段階以上に分けて版築を行っている。この版築は、講堂の基壇を造った後に行っているが、掘り込み地業が講堂と同時に行われているかどうかは不明である。（杉山）

東回廊　2トレンチで検出された掘り込み地業の肩の位置と22トレンチで検出した版築の西端の位置が一致することから、東側の回廊を確認した。回廊の中心軸は、主要伽藍の中心軸から27m（90尺）東のところに位置している。その規模は、22トレンチの断面から東西幅は約420cm、整地面からの高さは西側では約20cmを測るが、東側では削平を受けているため不明である。築造過程は整地面から掘り込み地業を行いその上に7枚以上の版築が行われている。2・22トレンチでは、回廊に伴う遺構は、直径30cmの柱穴が西側肩口で検出された以外の遺構はなかった。この柱穴は版築を行うときに使用されたと見られる。

1トレンチで講堂への取り付きが確認できなかったが、西側と同様に取り付いていたと思われ4トレンチで確認されていないのでさらに南まで延びると考えられる。（大谷）

第2節　その他の遺構

（1）西側建物（第39図）

11トレンチの調査結果から寺域の西部に寺院に伴う建物の存在が確認できた。その規模は、80cm前後の方形の掘り方をもつ東西7間の建物であった。そこで20トレンチで南北の規模を確認すると北側に廂をもつ2間以上の建物であることがわかった。さらに、27トレンチで確認すると柱穴は、一列にならなかった。27トレンチの柱穴の検出レベルが約5.5mで26トレンチで確認した旧地表面のレベル約6.0mからすると約50cm低く27トレンチの柱穴の深さ20～30cmを加えると70cmを越える掘立柱建物であることが推測される。当初、僧房あるいは食堂と考えられたが、その後の調査で南北2間以上で廂をもち、複数棟あるいは複数回の建て替えがあった建物としか現時点ではわからない。しかし、柱穴の掘り方や深さから推測するとかなりしっかりとした建物であることはうかがえる。（大谷）

（2）築　地

7トレンチで検出され、現地形で土塁状の高まりが見られたが、そのほぼ直下から同様の状況で版築が確認されたため築地と判断した。主軸方向はN-20°-Wで、版築部分は上面を竹根により攪乱されているが、高さ約50cmを測る。また、版築の東西の縁には溝が検出されその溝の肩間の距離は内幅210cm、外幅354cmを測る。築地は旧地表面の上に40～55cmの造成を行い平坦地を作った後、1～12cmの単位で版築を行っている。また、西側についてはさらに造成を行い東側より40cm高くしている。

この築地は北側は丘陵とつながっているが、南側は削平が著しく不明である。溝については東の溝

は丘陵裾を巡り北側区画溝につながって行くと推測される。また、西側の溝も北側については同様に丘陵裾を巡り西へつながっていくと推測される。19トレンチで検出した西側区画溝が東へ曲がって行くことからこれにつながって行くのだろうか。

時期は、7世紀代の須恵器と白鳳時代の瓦が少量ずつ造成土中に含まれることから主要伽藍よりも遅れて作られたと思われるが、版築の状況から古代でも古い時期と考えてよいだろう。　（杉山）

（3）寺域区画溝

北側区画溝　6トレンチで検出され、北側丘陵の南斜面を加工しその裾に幅約55cm、平坦面からの深さ約16cm、断面V字型を呈する。この溝が寺域北限を区画する施設の一部と考えられるが、本来的な寺域の北限は斜面上部に何らかの施設があると推測される。また、溝の南肩から245cmの位置に径24～30cmの楕円形で、深さ約9cmのピットを検出している。このピットは埋土が溝と同質・同色のものであることから同時期のものと判断され、溝の南側に柵列が巡る可能性がある。

時期を推定できる遺物は出土していない。

西側区画溝　11・19・21トレンチで検出された溝で、東丘陵から約一町半の位置にあたることから寺域の西限を区画する溝と判断した。主軸方向はN-15°-Wで、規模は幅200～256cm、深さ約40cmを測り、断面台形を呈する。11トレンチでは東側に約15cm高いテラスをもっている。埋土は褐灰色粘質土と灰褐色粘質土に分層され、埋土中には土器、瓦が多量に含まれている。

時期は、出土遺物から奈良時代と判断される。　（杉山）

（4）井戸1（第12図・図版6）

1トレンチの講堂北東部で検出した。井桁は残存していなかったが井側は約1×1mの方形で四隅に径10cmの丸木を打ち込んでいる。丸木には3×10cm程の縦長のほぞ穴を設け、そこに丸木を半截した材を横の桟木として用いている。さらにその裏に幅10～25cm、厚み2cmの板材を縦板とし、添え板として幅約10cm、厚み1cmの板材を用いて井側を作っている。深さはほぼ完掘したところで東壁が崩壊したため詳細は不明だが、2m以上になるであろう。また、掘り方は井戸の中心から約3m南側でのみ確認した。

時期は、掘り方埋土中から備前焼椀が出土したことから鎌倉時代前半に造られている。また、廃絶の時期については詳細は不明だが、下層から鎌倉時代終わり頃の備前焼が出土していることからこの時期までは使用されていたと判断される。　（杉山）

（5）土　壙

土壙1（第11図）

1トレンチの講堂北で検出した。規模は調査中に西半分を掘削したため不明だが、推定長40～60cmの楕円形を呈し、深さは残存部分で22cmを測る。土壙埋土は3層に分層され、穴を埋めたのちに備前焼大甕の口縁部と平瓦を据えている。西半分については残存していないが、本来は同様に備前焼が据えられてあっただろう。また、中央部には数十cmの厚さで炭のみが堆積しており、用途として火葬墓または、炭壺の可能性が考えられる。

時期は、井戸1の掘り方上に築かれていることと備前焼から鎌倉時代後半以後と判断される。

土壙２（第17図・図版７）

２トレンチで検出した瓦組み土壙である。南北150cm、東西約100cm、深さ20cmの長方形を呈し、主軸はN－５°－Wである。瓦は土壙の底から15cmを土で埋め戻した後に壁面部分を立て、その内側を敷き詰めるようにして入れられている。使われている瓦はすべて白鳳時代の瓦で、コンテナ約10箱が出土した。

時期は、共伴した土器から平安時代である。

土壙３（第56図・図版11）

４トレンチで検出した瓦組み土壙である。南北90～100cm、東西約140cm、深さ20cmのやや東側が狭い長方形を呈し、主軸はN－92°－Wである。瓦は壁面部分を立て、その内側を敷き詰めるようにして入れられている。使われている瓦はすべて白鳳時代の瓦で、コンテナ約10箱が出土した。また、東側の調査区の土層を観察すると瓦の上に約10cm程の盛土が見られた。

このことからこの遺構が何らかの遺構の下部構造になる可能性が考えられる。

時期は、奈良時代の平瓦を含む土壙を壊して造られていることからそれ以後と推定され、構造が土壙２と類似することから平安時代であろう。

土壙４（図版12）

４トレンチで一部を調査した。幅約145cm、深さ53cmで長楕円形を呈すると思われる。埋土中には、完形品を含めてコンテナ５箱の土器が含まれていた。また、底面には器台が置かれた状態で出土したことから何らかの意図的な廃棄が考えられる。

時期は、出土した土器から弥生時代後期前半と判断される。（杉山）

（６）鍛冶炉群（第23図・図版14）

５トレンチの回廊上で14基を検出した。平面形は方形、長方形、楕円形で、規模も20～60cmとさまざまである。これらが回廊上でのみ操業された理由として、鍛冶炉は湿気を嫌うため、下部に除湿構造を築くことがあるが、回廊上であれば人意的な造成土の上であることからそれを省くことができる。また、講堂基壇に築かれなかった理由としては、回廊の方が版築土が柔らかく掘り易かったためと考えられる。

鍛冶の材質についてはスラグの分析を行っていないため明確にできないが、鍛冶炉３の焼土に混じって銅片を採集している。また、鍛冶炉７の炉底滓に緑錆が見られることから、すべての鍛冶炉が銅鍛冶とは断定できないが、このうちのいくつかは銅鍛冶を行っていたと判定される。

鍛冶炉群の時期は、鍛冶炉３の埋土中から備前焼の杯が出土していることから鎌倉時代前半と考えられる。

鍛冶炉は現状で保存するため楕円形と方形のものを１基づつ発掘調査を実施した。

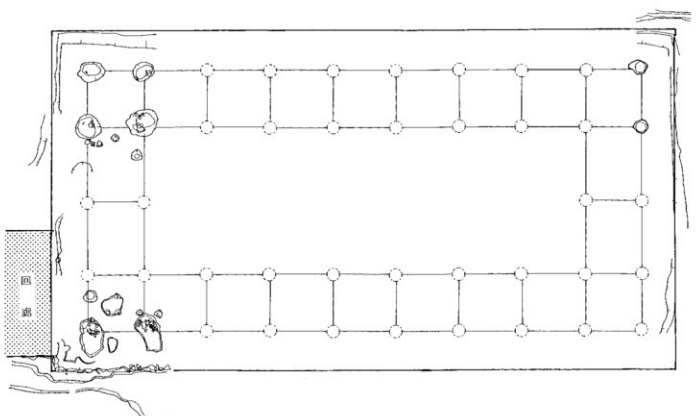
鍛冶炉４（第57図・図版16）

一辺30cmの方形を呈し、西隅の部分がやや突出し底面に向けて緩やかな傾斜をもつ。このことから、西隅に輸が取り付けられていたと推定され、東側の底面が最も高温になった状況を残していることと合致する。炉は回廊を掘り込んだ後、確認できたところで３cm程の粘土を貼り築かれており、深さは約９cmである。

鍛冶炉２（第58図・図版17）

径25～30cmの楕円形を呈し、南東側にやや突出し底面に向けて緩やかな傾斜をもつ。このことから南東部に鞴が取り付けられていたと推定される。底面には５×２cm大のスラグが残存していた。炉は鍛冶炉４と同様に回廊を掘り込んだ後３cmほどの厚さで粘土を貼っており、深さは６cm程である。

（杉山）



第３図　講堂復元模式図（1/200）

第5章　遺　　物

第1節　瓦　　類

（1）**軒丸瓦**（別表1・第59～61図・図版42～43）

軒丸瓦は、187個体確認でき11種類に分類できる。

1A類（1・2）複弁8葉蓮華文を内区主文様とする。蓮弁は、後述する2類に比べやや短い。中房の外周には圏線がめぐる。蓮子は丸みをもち、周囲に圏線をもつ。数は1＋5＋9。外縁は内半分が傾斜縁で、傾斜部分に面違鋸歯文がめぐるが、外半分はヘラケズリされ素文。直径18.5cmほどで、瓦当厚は約1.8cmとやや薄い。瓦当裏面および側面はナデによる調整が施されているが、裏面の一部にはヘラケズリの痕跡が残る。6個体出土。

1B類（3）直立縁で外区内縁に面違鋸歯文もしくは凸鋸歯文がめぐる。内区主文様は不明であるが、複弁8葉蓮華文と推定される。1個体出土。

2類は、1類と基本的には同じであるが、外区に鋸歯文をもたないことが特徴である。中でも2A類の出土量は115個体を数え、出土した軒丸瓦の約61.5%を占める。このうちa・b・cに細分できるものが33個体ある。

2A類a（4）複弁8葉蓮華文を内区主文様とする。蓮弁は1類に比べると長い。中房はやや突出し、外周に圏線がめぐる。蓮子は円錐形で、周囲に圏線が認められる。数は1＋6＋11。一つの間弁の外側に、外区外縁と接する笵キズが1カ所みられる。直径約17cm、瓦当厚は1.5cmから2.5cmのものがある。瓦当断面の観察により、笵型への粘土の充填が2回にわけておこなわれたことを示す資料がある。瓦当裏面はナデ、側面はヘラケズリの後ナデによる調整が施されている。10個体確認。

2A類b（5）2A類aと同様の蓮子であるが、蓮子周囲の圏線がよりシャープである。圏線の彫り直しか。直径16.2cm、瓦当厚約2.5cm。調整は2A類aに同じ。6個体確認。

2A類c（6）2A類bに比べて、中房外周の圏線の断面、蓮子および蓮弁の断面がやや丸みをおびている。特に、蓮子はやや大きめの半球形で、2A類bの蓮子部分を彫り直した可能性が考えられる。このグループの蓮弁は、前述の間弁外の笵キズのほか少なくとも1カ所の笵キズが認められ、蓮子の彫り直しとともにa→b→cという流れがわかる。直径約17cm、瓦当厚2.0cm前後。調整は2A類aと同じ。17個体確認。

2B類（7）複弁8葉蓮華文を内区主文様とする。2A類の内区径約13cmに比べ、11cm弱と小ぶりである。中房はわずかに突出し、外周に圏線がめぐる。蓮子は1＋6＋11で、周囲に互いに接する圏線をもつ。瓦当裏面はナデ調整。3個体出土。

3　類（8）複弁8葉蓮華文を内区主文様とする。蓮弁の彫りは、1・2類に比べやや浅い。中房はやや突出し、外周に比較的太い圏線がめぐる。蓮子は、半球形で1＋5＋8か。瓦当側面はヘラケズリとナデ、瓦当裏面はナデ調整がなされている。1個体出土。

4　類（9）陰刻の複弁8葉蓮華文を内区主文様とする。全体的な文様は2A類と同じである。中でも蓮子部分が丸くくぼむことから、2A類cの瓦が笵型として使われた可能性が推定される。このことは、内区の直径が約11.8cmで、2A類cが約13cmであり、この約10%の差を焼き縮みと考えるこ

とができるからである。５個体出土しているが、いずれも火災に遭っている。

５　類（10）複弁８葉蓮華文を内区主文様とする。蓮弁は比較的長い。中房は突出しており、外周の圏線はない。蓮子は１＋６。瓦当裏面および側面はナデによる調整が施され、外縁の一部にヘラケズリの痕跡が認められる。直径は16cmから17cm、瓦当厚は2.5cm。５個体出土。

６　類（11）複弁６葉蓮華文を内区主文様とする。弁の彫りは非常に浅く、先端は外区外縁の内側を彫り込んで表現している。中房は低く丸く盛り上がり、外周に圏線がめぐる。蓮子は低く、１＋４＋８。外縁の立ち上がりは低く、幅は約６mmと狭い。瓦当の裏面から側面は角をもたず、丸くナデ調整が施されている。しかし、５個体出土のうち１点は、瓦当裏面に布目痕が残る。直径は約14cm、瓦当厚は約３cm。５個体出土。

７Ａ類（12）瓦当の半分が欠損しているため弁数は不明だが、単弁10葉蓮華文と推定される。蓮弁の大きさは不揃いで、先が尖りぎみである。中房は突出しておらず、外周に圏線がめぐる。蓮子は大きく、丸みをおび、１＋４。外縁の立ち上がりが比較的高い。瓦当側面と裏面及び丸瓦凸面はナデ調整がなされ、丸瓦凹面には布目痕が残る。直径は約14cm、瓦当厚は約１cm。２個体出土。

７Ｂ類（13）単弁14葉蓮華文を内区主文様とする。弁数は違うものの調整、焼成、胎土も７Ａに酷似する。丸瓦凹面に粘土板切り離し痕が明瞭に残る。また、粘土板合わせ目と推測される部分もある。直径14.3cm、瓦当厚約１cm。１個体出土。

８　類（14）複弁４葉蓮華文を内区主文様とする。文様の彫刻は大きさ、バランスともかなり不揃いである。間弁は先端が幅広で、両脇に１本の子葉状の文様を配する。中房は丸く盛り上がり、笵型は使用しているが、竹管で押したような１＋５の蓮子を配する。外区には１本の圏線がめぐるが、この部分を指でナデたものが多い。丸瓦凹面から下半の土堤状の高まりの内面まで一連の布目痕が残る。瓦当側面はナデ調整が施されている。瓦当裏面の土堤状の高まりの端部と丸瓦側面はヘラ切りされている。以上の特徴から杵型１本造りと考えられる。そして、瓦当断面の観察において、杵型に粘土をかぶせるときに薄く粘土を延ばし、数枚重ねるようにしたものと、やや厚めの粘土をかぶせたものがあることがわかった。直径は14cm弱、瓦当厚は約1.5cm。講堂東南部の別の建物の周りの瓦溜まりから11個体出土。

９　類（15・16）素弁４葉蓮華文を内区主文様とする。弁の彫りは非常に浅く、中房の中央に直径約２cmの蓮子が１個確認できる。ただ、その周囲に蓮子があるかどうかは不明。瓦当側面はナデ調整、丸瓦凸面は縦ナデで一部ヘラケズリされている。玉縁部分は工具でオサエ、形造られている。瓦当裏面の土堤状の高まりと丸瓦の側面はヘラ切りされている。15では確認できないが、16では丸瓦凸面に大きな格子タタキが残り、瓦当裏面から丸瓦凹面にかけては一連の粗い布目痕が残る。８類と同様の技法のようであるが、土堤状の高まりの内側には布目がみえないものもある。直径は約14cm、瓦当厚は約1.5cm。８類と同一の瓦溜まりから２個体出土。

10Ａ類（17）左巻きの三巴文を内区主文様とする。巴の頭部は小さく先が尖り気味である。巴の末尾は外側の圏線に接する。外区の珠文の大きさは大小２種があり、交互に配す。瓦当表面に離れ砂を使用している。瓦当裏面は不整方向のナデ調整、丸瓦凸面は縦方向のナデ調整が施されている。後述の軒平瓦６類ｂと１トレンチ井戸の下層で共伴していることや、砂粒を非常に多く含む胎土や比較的堅緻な焼成が共通することから同軒平瓦に組み合うものと考えられる。直径15.5cm前後、瓦当厚2.5cm。12個体出土。

10B類（18）右巻きの三巴文を内区主文様とする。巴の頭部は10A類に比べてやや大きく先が尖り気味である。巴の末尾は相互に重なり合い圏線状をなしている。珠文の大きさは不揃いで密に配す。瓦当の裏面は不整方向のナデ、丸瓦凸面は縦方向のナデ調整が施され、凹面には布目痕が残る。直径15.5cm前後、瓦当厚3.5cm。10個体出土。

11　類（19）小片であるため詳細はわからないが、10～12葉の素弁蓮華文と推定される。瓦当の厚さは1.1cmで直径は約13cmに復元できる。1個体のみ出土。

（2）軒平瓦（別表2・第62～65図・図版44）

軒平瓦は24個体が確認でき、6種類に分類した。

1A類（20）4重弧文軒平瓦。瓦当の弧線の断面が丸いものを1類とした。低い段顎で、幅は6cm前後である。瓦当面は型挽き。瓦当部から顎、平瓦凸部には入念なナデ調整が施されており、その後ヘラケズリされた部分がある。平瓦凹面には瓦当付近まで布目痕が残る。2個体出土。

1B類（21）4重弧文軒平瓦。1A類に比べ瓦当部がやや薄い。低い段顎で、幅約5cm。調整は1A類と同様であるが、平瓦凸面に格子タタキが確認できる。3個体出土。

2　類（22）4重弧文軒平瓦。瓦当の弧線の断面が台形をなすものを2類とした。段顎で、幅4～5cm前後である。顎の一部に格子タタキが残ることから、平瓦部と顎は一体の製作であるとみることができる。平瓦部凸面は格子タタキ、凹面は布目痕が残る。5個体出土。

3　類（23）3重弧文軒平瓦。平瓦の広端部に型挽きで重弧文を描き、その後ヘラでさらに調整施文しているようである。無顎。平瓦凸面は格子タタキを軽く磨り消し、凹面は布目痕が残る。3個体出土。

4　類（24）均整唐草文軒平瓦。中心飾の左右2回反転する唐草を配するものである。上下の外区には界線を配しているが、脇区は不明。曲線顎で瓦当裏面はナデ調整が施され、顎の下面と凹面先端部はヨコヘラケズリされている。平瓦凸面は比較的小さい格子タタキが残る。平瓦凹面は粗い布目痕が残る。1個体出土。

5　類（25）均整唐草文軒平瓦。中心飾はなく連続した唐草が左右に5回反転する均整唐草文である。外・脇区に界線が配されているが、下外区のみ2本、他は1本である。上外区には、界線の外側に外向凸鋸歯文を配している。また、内区左唐草部分に鋸歯文が1つある。左右の脇区には、文様のほかに範型外の無文部分が残る。曲線顎で瓦当裏面はナデ調整が施され、平瓦凸面には大きい格子タタキが、凹面には荒い布目痕が残る。1個体出土。

6A類（26）均整唐草文軒平瓦。菱形の中心飾から左右に4回反転すると推定される唐草を配するものである。上外区のみ界線があり、その上に珠文を密に配している平瓦凸面先端に顎をつけ、ナデで段顎を作っている。平瓦凸面先端側には、顎部接合のためのヘラキズを入れている。平瓦凸面は格子タタキ、凹面は布目痕が残っている。表面全体に細かな砂が目立つ。2個体出土。

6B類（27）均整唐草文軒平瓦。6A類同様の唐草を配するが、やや唐草の巻が緩やかである。上外区のみ界線があり、その上に珠文を3個ずつ連ねて配する。調整は6A類と同様。2個体出土。

6C類（28）均整唐草文軒平瓦。6A類同様の唐草を配するが、6B類よりもさらに唐草の巻が緩やかである。上外区のみ界線があり、その上に珠文を密に配する。調整は6A類同様。5個体出土。

（3）丸　瓦（別表3・第66～69図）

丸瓦については詳細な検討ができてないため、ここでは特徴的な5種について概要を記すにとどめる。

丸瓦A（29）半截円錐台形の行基式丸瓦。粘土板巻きつけ技法。凸面にタタキの痕跡は認められない。縦ヘラケズリの後ヨコナデ調整を行う。両端面はヘラケズリ調整。

丸瓦B（30）半截円錐台形の行基式丸瓦。粘土板巻きつけ技法。凸面の格子タタキの上をヨコナデ調整。両端面はヘラケズリ調整。

丸瓦C（31）広端部凸面に断面が丸い凸帯をつけた丸瓦。金堂周辺のトレンチから出土しており、創建時からの丸瓦であったと推定される。

丸瓦D（32）半截円錐台形の行基式丸瓦。凸面に広い格子タタキ、凹面に目の粗い布目痕が残る。講堂東南部の別の建物の周りの瓦溜まりから軒丸瓦8類などとともに出土していることから、これらと組み合うと考えられる。

丸瓦E（33）玉縁式丸瓦。凸面に縄タタキの痕跡が残る。1トレンチ北側井戸及びその周辺で完形品に近いものがまとまって出土した。巴文軒丸瓦と組み合うと考えられる。

（4）平　瓦（別表4・第70～72図）

平瓦については詳細な検討ができてないため、ここでは特徴的な4種について概要を記すにとどめる。また、タタキの原体にはいろいろな種類のものがみられるが、これについては第76～77図に示した。

平瓦A（34）凸面に格子タタキを残す厚手の平瓦である。凹面には布目痕と明瞭な模骨の板目痕が残る。凹面の端面側と側面側少々と側面及び端面はヘラケズリ調整を施す。厚さ3.7cm

平瓦B（35）凸面に平行タタキを残す厚手の平瓦である。凹面には布目痕と明瞭な粘土板切り離し痕が残る。凹面の側面側と側面及び端面はヘラケズリ調整を施す。断面の観察により2枚の粘土板をあわせたことが認められる。厚さ4.2cm

平瓦C（36）凸面に細かな格子タタキを残す平瓦である。凹面には布目痕が残る。粘土板の合わせ目みられる部分があることから、平瓦桶巻作りよる製作であることがわかる。両側面と端面はヘラケズリによる調整。厚さ2.8cm

平瓦D（37）凸面にタタキの痕跡は認められず、部分的にわずかに布目痕が残る部分がある。凹面には布目痕がない。凹面、凸面ともナデ調整、側面と端面はヘラケズリ調整。厚さ2.7cm。

（5）塼（別表5・第73図）

塼は、数個体が出土しているが、いずれも金堂及びその周辺に設定したトレンチからの出土量が多い。平成2年度の緊急発掘調査では、須弥壇の北側で立った状態で検出された以外に、この周辺から出土したことから、塼積み、または塼を立てた須弥壇であったと推測される。

塼　1（38）厚さ約4cm。表裏面の端部側はヘラケズリを施す。表面は斜め方向のヘラケズリ、裏面はナデ、側面はヘラケズリ調整。焼成は堅緻。

塼　2（39）厚さ約4cm。表面は板状工具によるナデ調整、裏面はヨコナデ、側面はヘラケズリの調整が認められる。焼成は堅緻。

（6）鴟　尾（別表6・第74～75図・図版45）

鴟尾は8個体が出土している。講堂周辺から7点、西側建物跡から1点。ただし、西側建物跡出土のものは、摩滅しており、2次的に持ち込まれた可能性もある。

鴟尾1（40）凸帯がカーブする部分の破片である。調整は表が細かい格子タタキ、裏は同心円文当て具痕及び表同様の格子タタキ、側面はヘラケズリ。凸帯の断面は、上面が中窪み台形を呈する。2本の凸帯の間に直径約4㎝の珠文の剝離痕が3カ所ある。いずれも珠文があった周囲に調整時のヘラキズがある。鰭はヘラケズリで小さく段がつくられている。厚さ3～3.5㎝。

鴟尾2（41）底部の破片。表は細かい格子タタキ上をヘラケズリ、さらにナデ。裏はヘラケズリとナデであるが、わずかに格子タタキの痕跡が認められる。底部はヘラケズリ。凸帯は、断面半円形を呈する。

鴟尾3（42）凸帯と珠文部分。表は格子タタキ、裏は同心円文当て具痕を軽くナデている。珠文及び凸帯は丁寧にナデ調整されている。凸帯の断面は半円形。珠文は半球形で直径約6㎝。

（7）鬼　瓦（43）（別表7・第75図・図版45）

鬼瓦と見られるものが1点出土している。剝離しているものの突起の周囲に凸線が巡っていたことが確認できる。小片のため詳細はわからないが、表面突起の周囲はナデ調整、板状工具によるナデ調整。（池田）

第2節　土　器　類

（1）遺構出土の土器（別表10・第78～79図・図版46～47）

講堂出土の土器（44）44は基壇西部隅の礎石抜き取り穴から出土した備前焼小皿で、礎石抜き取りの際に埋められたものと思われる。時期は、鎌倉時代のものと考えられる。

図示した以外には、基壇東辺の北側と東側からは鎌倉時代を主体として奈良・平安時代の土器がコンテナ2箱分、基壇南西部では平安時代の土器を主体としてコンテナ1箱分が出土している。

西側区画溝出土の土器（45～49）主に11トレンチからまとまって出土している。45～52・54～59は須恵器である。45は円面硯の脚部で十字の透かしが見られる。46～49は蓋、50・51杯身、52は皿、54・55甕、56～59は甕である。53は土師器で、内面に暗文は見られず、外面体部にはミガキ、底部にはナデが見られる。図示した以外にも、須恵器・土師器の甕がコンテナ1箱分出土しているが、すべて奈良時代のものである。

井戸－1出土の土器（60～66）60～64・66は井筒内から出土し、65は掘り方内から出土した。60・61は土師器椀、62・63は土師器小皿、64は陶器杯、66は備前焼甕である。小皿の62はヘラ切り、63は糸切りである。64は底部にヘラ切りが見られる。65は備前焼椀で底部に糸きり後高台が貼り付けられている。これらの時期は鎌倉時代が当てられる。

図示した以外に、土師器の甕、瓦質の鍋など生活雑器がコンテナ1箱分出土している。

土壙－1出土の土器（67）土壙掘り方の上面に据えられていた備前焼の大甕である。須恵質で外面体部には平行の叩き痕が見られ、内面は板状の工具痕を残して丁寧にナデられている。

土壙－2出土の土器（68・69）68は須恵器の蓋、69は土師器の椀である。土壙内の瓦は全て白鳳時代であったが、土器の時期は平安時代である。

土壙－4出土の土器（71～81）71・72は壺、73・74は甕、75～78は鉢、79・80は高杯、81は器台である。81の器台は筒部に3×4の2段の方形透かし、脚部に4つの円形透かしがある。これらの時期は、図示した以外に出土しているコンテナ5箱の土器を含めて、弥生時代後期前半が当てられる。

鍛冶炉－3出土の土器（70）備前焼の杯は鍛冶炉の埋土内から出土した。類品の報告例は少ないが備前市胡耶山奥窯址からの出土が報告されていることから鎌倉時代のものと考えられる。

（2）遺構に伴わない土器（別表10・第80～81図・図版48～49）

遺構検出中にコンテナ約15箱の土器が出土した。このうち寺院創建前後のものを中心に図示した。

82は縄文時代後期の福田K2式の鉢である。83は弥生時代後期の器台で、脚部に鋸歯文が見られる。84は軟質土器の甕の手である。85～97は古墳時代後期の須恵器、98～102は平安時代の土師器、103～111は鎌倉時代から室町時代の備前焼、112・113は輪入白磁である。（杉山）

第3節　その他の遺物

（1）土製品（別表11～12）

螺　髪（114～120）平成2年度の緊急発掘調査で、金堂須弥壇上から塑像の螺髪が7点出土した。すべて円錐形で、型作りである。114～116、117・118、119、120の4種の型で作られている。119は型作りの後、螺旋の巻きに修正を加えている。120は他の6点に比べて高さ、底径がやや小さく、底部を斜めに切っている。いずれも底穴はなく、117・118の底部には何らかの接着剤の痕跡が残る。114～119の大きさから丈六仏であったと推定される。他に比べてやや小さい120は、耳や襟足付近の螺髪であるとも考えられる。しかしながら出土したすべての螺髪が一体の仏像のもので、螺髪の補修により複数の型が使われたものか、複数の仏像が安置されていたのかについては、螺髪以外の塑像片が出土していないため確認できない。（池田）

（2）石器・石製品（別表12）

旧石器（123）ナイフ形石器で先端部は欠損しているが、基部に打面を残している。

砥　石（124）規格のとれた方形をしており、全面に粗い擦痕が見られる。

（3）金属製品（別表12）

鉄製品（125～131）125は2cmと厚手だが形状から火打金と思われる。126は轡金具と思われ、上部が欠損しているが板金に鋲が2個残存している。127～131は釘である。

銅製品（132～136）132～135は銭で132・135は錆化が著しい。136は耳環である。（杉山）

第6章　考　　察

第1節　伽藍配置と規模

古代の寺院は、現代の法隆寺のように広大な敷地を塀や柵で囲み、その中に回廊で囲まれた金堂や塔などの大規模な建物をもつのが一般的である。塀や柵で囲まれた寺の敷地を寺域ないしは寺地と呼び、金堂や講堂・塔などの主要な建物の配置のあり方を伽藍配置と呼んでいる。寺域や伽藍配置に一定の規則性があり、大和の主要寺院の伽藍配置を標識として「○○寺式伽藍配置」と呼んでいる。

ここでは服部廃寺の寺域の規模と伽藍配置の復元を試みる。

寺域の規模　寺域を区画する施設として、一般的には築地・柵・溝などがある。

服部廃寺の寺域の北と東には、それぞれ天寺山、花光寺山の低丘陵が控えている。天寺山の寺域に面する丘陵南裾は、現状でも東西方向に人工的に削って造成された形跡が認められる。調査の結果、丘陵の南側の一部を削り、さらにその下部に東西方向に溝1条が検出された（6トレンチ）。このことにより、天寺山丘陵南裾を寺域の北限とみてよさそうである。

調査区の西側では、南北方向の溝を検出した（11・19・21・28トレンチ）。11と21トレンチの溝は、後述する金堂と講堂の中軸線に対し、南で約4°東へ傾く。11トレンチの溝は、東肩が金堂・講堂中軸線から75mの距離に位置する。また、寺域東の花光寺山丘陵南西端から約150m（約1町半）の距離にあり、溝の東には、比較的大きな掘立柱建物跡を検出していることから、この溝を寺域の西限を区画する溝とみる。

寺域の東限および南限は、今回の調査では検出できなかった。しかながら、寺域の東限については、前述のように花光寺山丘陵西南端から寺域西限の溝までが約150mであることから、ここでは最大で東西150mの寺域を想定する。ただし、東側の北限では、地形的に東西150mの寺域を確保することはできない。したがって、現在の花光寺山丘陵端を寺域の東限とするならば、台形状の寺域であったことが考えられる。

一方、寺域の南限の調査区では、古墳時代以前の遺構等は検出したものの、寺に関連する時期のものについては未検出である。しかし、後述する伽藍配置の想定から、少なくとも南北150mの寺域が考えられる。また寺域の北限から約215mの距離で東西方向に通る農道を寺域の南限と想定するならば、南北2町であった可能性もある。

以上のことから、服部廃寺の寺域を東西最大で1町半、南北1町半ないしは2町と想定する。

伽藍配置　寺院を構成する建物は、金堂・塔・講堂・中門・回廊・南門・僧坊・食堂・鐘楼・経蔵などである。このうち前5者を中心伽藍と呼ぶ。

服部廃寺で検出した明確な伽藍は、金堂・講堂で、金堂の東西で回廊と推定される遺構を検出している。前述の寺域の南北中心線上と金堂と講堂の中軸がほぼ一致している。また、当初、法起寺式伽藍配置を想定して設定した2・4・29トレンチにおいて塔が検出されなかったことや、金堂の東西で回廊と推定される版築を検出していることから、塔は金堂の南側に建てられていた可能性が高い。

したがって、金堂・塔・講堂が南北一直線上に並ぶ四天王寺式伽藍配置が想定できる。また、寺域の北限から約1町南で東西に通る農道を南面回廊跡と考えるならば、これと寺域のほぼ中心線に沿っ

て南北に通る農道の交差する地点に中門が位置していたことになる。また、この交差点に塔を想定することも可能である。いずれにせよ現在では、東西・南北の道路とも一般生活道となっているため、今後の調査は困難が予想されるが、塔をはじめ回廊・中門・南門等の建物を追求し、さらにその伽藍配置の詳細を明らかにする課題が残されている。（池田）

第2節　服部廃寺の変遷

第1次～第4次までの発掘調査で得られた成果により、服部廃寺の変遷を、寺院建立以前の時期・寺院創建の時期・平安時代末期の再建の時期・寺院廃絶の時期の4期に分けることができる。以下、各時期の概要を述べ、服部廃寺の創建とその後の変遷について考える。

（1）寺院創建以前

寺院の造られた地は、発掘調査以前の分布調査等で弥生時代から古墳時代の遺物が採集される丸山遺跡の範囲の中であり、今回の発掘調査でも遺構・遺物が見られる。

弥生時代以前は、旧石器1点と縄文土器1点が出土している。旧石器はナイフ形石器で2トレンチの旧耕作土床土から出土している。縄文土器は後期前半の福田K2式の大型の有文皿で11トレンチの黄色基盤層上面から出土した。いずれも摩滅、風化がほとんど見られないことから、遺構を伴っていないが微高地上での活動がうかがえる。

弥生時代、特に後期以後になると遺構に伴って遺物が見られ始める。後期前半には4トレンチで、多量の土器を含む土壙4が見られる。また、後期後半には25トレンチで竪穴住居跡が検出され、この頃から集落が営まれ始めている。

古墳時代は、前期には16トレンチで竪穴住居跡が2軒検出され、東丘陵上に花光寺山古墳が築かれている。また21トレンチや花光寺山古墳の東側の地区では、軟質系土器が採集されている。渡来系遺物から、この時期この一帯の集落の人々と渡来人との交流を示唆している。後期になると確実な遺構は検出されないものの遺物の出土量が多くなる。4トレンチでは6世紀後半から7世紀前半の須恵器がまとまって出土している。また、3トレンチでもほぼ同時期と考えられる耳環が出土している。

以上のように旧石器時代、縄文時代の遺物も見られるが、この地に集落が営まれるのは弥生時代後期からと考えられ、以後多少の移動は見られるものの寺院創建時まで連綿と集落が営まれていた様子がうかがえる。（杉山）

（2）創　建

これまでの調査で、軒丸瓦では1類から11類、軒平瓦では1類から6類まで確認することができた。このうち服部廃寺では、軒丸瓦1A類・1B類・2A類a・b・c・2B類・3類を、軒平瓦では、1A類・1B類・2類・3類までを創建瓦、またはそれに近い時期の瓦と考えている。複弁8葉蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦はセットなすもので、天智元年（662）から天武2年（674）までの間に創建された川原寺の創建瓦を標識とする川原寺式と呼ばれるものである。軒丸瓦の蓮子数、外縁の鋸歯文のあり方、その有無などの違いはあるものの、軒丸瓦から7世紀代末頃の創建とみてよいであろう。

服部廃寺の瓦窯とされる産土池窯跡では、軒丸瓦２Ａ類のほか、軒平瓦１Ｂ類、丸瓦Ｃや博などとともに須恵器杯身（図版137）が採集されている。底部が平らで、口縁がやや外反気味に立ち上がる形態のもので、陶邑編年Ⅱ型式２段階ないしは３段階に比定できる。産土池窯跡で採集される遺物は、瓦類がほとんどで、須恵器が採集されることはあまりない。したがって、瓦陶兼業の窯ではあるが、主に瓦を焼くための窯であったと考えられる。

創建瓦のうち軒丸瓦では２Ａ類の出土が最も多く、すべて同一笵で全体の約56％を占める。金堂・講堂に設定したいずれのトレンチからも出土している。この出土状況を積極的に理解するならば、創建に際して、金堂・講堂ともほぼ同時期に造営された可能性が指摘できる。

ここで再度整理すれば、服部廃寺は軒丸瓦１類から３類、軒平瓦１類から３類を創建瓦とし、７世紀末頃に中心伽藍の金堂と講堂は、比較的近い時期に造営されたと考えられる。（池田）

（３）平安時代末期の再建

７世紀末の創建以降、講堂の一部補修が行われていたことは、軒丸瓦４類・５類・６類・７類の補修瓦の出土によって知ることができる。しかしながら、後述する理由から平安時代のある時期に講堂が火災に遭い、その後、平安時代末期から鎌倉時代前半頃に再建されたものと考えられる。軒丸瓦４類は、いずれも講堂基壇外の埋土から出土したものであるが、すべてが２次的な火を受け軟化している。講堂の西側では、礎石が抜き取られているが、抜き取り穴から鎌倉時代前半頃の土器片が出土している。また、基壇上およびその周辺において、鍛冶炉を検出している。以上のことから、この時期には創建時の講堂の機能は失っているものと考えられる。一方、ほぼ同じ時期、創建時の講堂東側で、少なくとも２棟の建物があったことが推定される。ひとつは１トレンチ講堂基壇南東側の建物で、柱穴は検出していないが、瓦の散布状況（第８図）から南北幅約4.5m以上の建物であったことが推定される。建物周辺の瓦の中からは、軒丸瓦８類および９類、軒平瓦５類が出土している。

また、講堂基壇北東側では、検出した２個の礎石のうち、南側の礎石の上部から南にかけて瓦組遺構（第10図）を検出した。建物の地覆の可能性が考えられる。基壇上に柱穴はあるものの相関関係ははっきりしない。１トレンチの北側と井戸１から軒丸瓦10Ａ類・10Ｂ類、軒平瓦６Ａ類・６Ｂ類・６Ｃ類がまとまって出土しており、これらを使用した建物であった可能性がある。

以上のことから、平安時代末期以降、創建時の講堂は機能を失い、規模を縮小し何らかの建物が少なくとも２棟、寺域の東に建てられたことが推定される。

しかしながら、講堂の中央部が未調査のため、規模を縮小した講堂が基壇の中央部に存在した可能性は否定できない。（池田）

（４）その後の服部廃寺

寺院の廃絶期については明確ではないが、出土遺物の状況からある程度推察できる。

金堂では、出土瓦を見ると白鳳期のもののみで奈良時代以後の瓦は全く見られない。土器についても室町時代後半のものを除いては同様の状況である。

これらのことから、金堂は創建以後一度も改修されることなく廃絶したと考えられるが、時期については創建時に葺かれた瓦や建築物の耐久性をどの程度の期間ととらえるかでかなりの幅が考えられる。

しかしながら、講堂の改修・建替えから推定して平安時代前半頃には金堂としての機能が失われていたのではなかろうか。

講堂の廃絶期については鎌倉時代前半頃に東側への規模の縮小が見られたが、この時点で講堂としての機能は失われていると思われる。ただし、この時期の軒丸瓦10A・B類、軒平瓦5・6A～C類が葺かれていることから寺としての機能をもった建物が存在していた可能性は否定できない。

しかし、その建物も井戸が鎌倉時代の末頃には廃絶していることと室町時代前半の瓦や土器が見られないことから14世紀初頃前後には廃絶したものと考えられる。

これ以後、室町時代後半になって瓦や備前焼を中心とした土器類がまとまって見られはじめるが、これは現在も場所を移して残っている花光寺が再建される時期と考えられる。（杉山）

第3節　まとめにかえて

以上、服部廃寺の発掘調査で得られた成果をまとめた。平成3年に仮設道路工事中に礎石が発見されたことを契機に緊急発掘調査が行われ、平成4年度から国庫補助事業として発掘調査が開始された。そしてこれらの調査から得られた収集資料は膨大なものとなった。それまでの服部廃寺といえば、約20m×13mの土壇が、その周辺に瓦、土器が散布しており、採集した遺物から白鳳時代建立の古代寺院であること以外はわかっていなかった。

最初に発掘した土壇から、金堂の須弥壇が検出され、創建時のままの礎石の検出など、予想以上に良好な状態で保存されていることを確認できたことは今回の調査における大きな成果のひとつである。また、金堂跡の参道に続く階段を部分的であるが検出できその構造も明らかにできたことは、貴重な例となるだろう。これは、寺跡が近世以降も寺社地や参道などとして残り、土地の改変が少なかったことに起因するように思われる。

今回の5年にわたる発掘調査で、残念ながら塔跡、講堂の中央部及び中門、南門を含む南限を決める遺構、西側の建物群の規模と用途など確認することができなかった。今後伽藍配置と寺域など多くの残された疑問・課題を解決していくことが残された最大の使命である。

その後は、服部廃寺の復元を含めて、東側の県指定史跡の花光寺山古墳と併せて服部廃寺寺域全体を遺跡公園などとして保存・整備し、後世に継承することを最終目的にしたい。（大谷）

別表１　軒丸瓦計測表

番号	型式	直径	内区			外区		備考
			中房径	連子数	連弁	幅	文様	
1	1A類	(182)	58	(1+5+9)	複弁8葉	21	(内)面違鋸歯文 (外)素文	第1次1トレンチ包含層
2	1A類	(185)	(60)	(1+5+9)	複弁8葉	30	(内)面違鋸歯文 (外)素文	第3次18トレンチ
3	1B類	—	—	—	(複弁8葉)	23	(内)面違鋸歯文 (外)素文	第1次瓦溜まり1
4	2A類a	(170)	60	1+6+11	複弁8葉	13	素文	第1次3トレンチ包含層
5	2A類b	(162)	58	1+6+11	複弁8葉	—	素文	第3次18トレンチ埋土
6	2A類c	172	62	1+6+11	複弁8葉	13	素文	第1次1トレンチ瓦溜まり3
7	2B類	(135)	(51)	1+6+11	複弁8葉	—	—	第1次1トレンチ基壇東
8	3類	(160)	(55)	(1+5+8)	複弁8葉	15	素文	第3次18トレンチ基壇西
9	4類	(167)	(57)	1+6+11	複弁8葉	18	素文	第1次1トレンチ南深掘 2A類cの陰刻笵型
10	5類	(168)	46	1+6	複弁8葉	15	素文	第3次18トレンチ埋土
11	6類	(140)	(62)	1+4+8	複弁6葉	6	素文	第1次1トレンチ包含層
12	7A類	(136)	(52)	1+4	(単弁10葉)	11	素文	第1次1トレンチ溝1
13	7B類	143	58	1+4	単弁14葉	7	素文	第1次1トレンチ瓦溜まり3
14	8類	(133)	33	1+5	複弁4葉	10	(内)圏線 (外)素文	第1次1トレンチ溜まり3
15	9類	(140)	46	1	素弁4葉	12	素文	第1次1トレンチ瓦溜まり1
17	10A類	(154)			三巴文	14	(内)珠文(35) (外)素文	第1次1トレンチ井戸下層
18	10B類	(156)			三巴文	14	(内)珠文 (外)素文	第1次1トレンチたわみ
19	11類	(130)		(1+4)	素弁			第1次3トレンチ包含層

別表２　軒平瓦計測表

番号	型式	全長	上弦幅	下弦幅	弧深	内区文様	内区幅	外区文様	外区幅	顎	備考
20	1A類					4重弧				段顎	27トレンチ瓦溜まり
21	1B類		310	323	56	4重弧				段顎	2トレンチ瓦溜まり2
22	2類			300	(50)	4重弧				段顎	2トレンチ包含層
23	3類					3重弧				無顎	2トレンチ瓦溜まり2
24	4類					均整唐草	30			曲線顎	18トレンチ基壇西側溝
25	5類	322	248	302	60	均整唐草	30	鋸歯文	22	曲線顎	1トレンチ瓦溜まり1
26	6A類					均整唐草	28	珠文	24	段顎	1トレンチ東溝
27	6B類					均整唐草	25	珠文	18	段顎	1トレンチ井戸下層
28	6C類					均整唐草	22	珠文	25	段顎	3トレンチ西畦

単位（㎜）（　）は推定値

別表3　丸瓦計測表

番号	分類	全長	広端幅	狭端幅	凸面	凹面	備考
29	丸瓦A	380			タテヘラケズリ・ヨコナデ	布目	
30	丸瓦B		183		格子タタキ・ヨコナデ	布目	1トレンチ瓦溜まり1
31	丸瓦C				凸帯・ヨコナデ	布目	2トレンチ瓦溜まり2
32	丸瓦D			(125)	格子タタキ	布目	1トレンチ瓦溜まり1
33	丸瓦E	374	(145)		縄タタキ	布目	1トレンチ井戸

別表4　平瓦計測表

番号	分類	全長	広端幅	狭端幅	厚	凸面	凹面	備考
34	平瓦A				37	格子タタキ	布目	1トレンチ井戸
35	平瓦B				42	平行タタキ	布目	金堂須弥壇北
36	平瓦C	406	315		28	格子タタキ	布目	4トレンチ瓦溜まり
37	平瓦D			245	27	ナデ（布目）	ナデ	18トレンチ埋土

別表5　塼計測表

番号	分類	全長	厚	表面	裏面	側面	備考
38	塼　1		40	ヘラケズリ	ナデ	ヘラケズリ	金堂表採
39	塼　2		40	板状工具ナデ	ヨコナデ	ヘラケズリ	18トレンチ埋土

別表6　鴟尾計測表

番号	分類	珠文		凸帯		厚	表面	裏面	側面	備考
		直径	高	幅	高					
40	鴟尾1	(40)		25～30	12	30～35	格子タタキ→ヘラケズリによるヒレ	同心円文当て具・格子タタキ	ヘラケズリ	1トレンチ包含層
41	鴟尾2			22	10	36	格子タタキ→ヘラケズリ・ナデ	ヘラケズリ・ナデ・格子タタキ	ヘラケズリ	1トレンチ包含層
42	鴟尾3	60	20	18	8	25	格子タタキ	同心円文当て具・ナデ		1トレンチ包含層

別表7　鬼瓦計測表

番号	分類	全長	厚	文様	表面	裏面	備考
43	鬼瓦		32	突起の周囲に凸線	ナデ	板状工具ナデ	1トレンチ包含層

単位（mm）（　）は推定値

別表８　軒丸瓦調査区別出土数

トレンチ / 型式	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	計
	○	△	◎△		○			△	△	△					◎			○													
1A類	1		3						1									1														6
1B類			1																													1
2A類a	2		3	2	1			2										2														10
2A類b			1	1	2				1									1														6
2A類c	4	1	1	1	2				1						1			5		1												17
2A類	26	9	14	6	7			5	2						2			9														82
2B類	1		1		1																											3
3類																		1														1
4類	3				1													1														5
5類	2		1															2														5
6類	2	2																1														5
7A類	2																															2
7B類	1																															1
8類	11																															11
9類	2																															2
10A類	9		1						2																							12
10B類	7		2															1														10
10類	4		1		1				1																							7
11類			1																													1
計	77	12	30	10	15			2	11	2					3			24		1												187

別表９　軒平瓦調査区別出土数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	計
1A類		1																									1					2
1B類	1	1		1																												3
2類	3				1				1																							5
3類		2																1														3
4類																		1														1
5類	1																															1
6A類	2																															2
6B類	1		1																													2
6C類	3		2																													5
計	11	4	3	1	1				1									2									1					24

◎金堂周辺トレンチ　○講堂周辺トレンチ　△回廊周辺トレンチ

別表10　土器計測表

番号	調査区	遺構名	種別	器種	計量値(cm)	色調	胎土	焼成	備考
44	5トレンチ	礫石抜取り穴	備前焼	小皿	口径7.0、器高1.7	淡灰	微砂	良好	
45	11トレンチ	西側区画溝	須恵器	甕		(表)暗青灰(断)鈍い紫	微砂	良好	
46	11トレンチ	西側区画溝	須恵器	蓋	つまみ径2.8	灰	細砂	良好	
47	11トレンチ	西側区画溝	須恵器	蓋	つまみ径3.0	青灰	微砂	良好	
48	11トレンチ	西側区画溝	須恵器	蓋	口径16.2	暗灰	細砂	良好	
49	11トレンチ	西側区画溝	須恵器	蓋	口径(14.2)	灰白	微砂	良好	
50	11トレンチ	西側区画溝	須恵器	杯身	口径17.0、器高4.4、高台径13.2	灰	細砂	良好	
51	11トレンチ	西側区画溝	須恵器	杯身	高台径11.0	青灰	細砂	良好	
52	11トレンチ	西側区画溝	須恵器	皿		灰白	微砂	良好	
53	11トレンチ	西側区画溝	土師器	皿	口径26.6、器高3.1	明橙	微砂	良好	畿内産
54	11トレンチ	西側区画溝	須恵器	甑	口径23.8	灰白	微砂	良好	
55	11トレンチ	西側区画溝	須恵器	甑		鈍い橙褐	微砂	良好	
56	11トレンチ	西側区画溝	須恵器	甕		暗灰	微砂	良好	
57	11トレンチ	西側区画溝	須恵器	甕		灰	微砂	良好	
58	11トレンチ	西側区画溝	須恵器	甕		灰白	細砂	良好	
59	11トレンチ	西側区画溝	須恵器	甕		淡黄灰	微砂	良好	
60	1トレンチ	井戸－1	土師器	椀	高台径4.3、高台高0.4	灰白	細砂	良好	早島式
61	1トレンチ	井戸－1	土師器	椀	高台径3.6、高台高0.3	鈍い灰白	細砂	不良	早島式
62	1トレンチ	井戸－1	土師器	小皿	口径6.8、器高1.1	橙	精緻	不良	
63	1トレンチ	井戸－1	土師器	小皿	口径8.0、器高1.3	灰白	微砂	良好	
64	1トレンチ	井戸－1	陶器	杯	口径(13.4)、器高2.9	赤褐	精緻	良好	備前焼か
65	1トレンチ	井戸－1	備前焼	椀	口径11.0、器高3.3	灰白	細砂	良好	貼付高台
66	1トレンチ	井戸－1	備前焼	甕	口径20.6	暗紫灰	細砂	良好	
67	1トレンチ	土壙－1	備前焼	甕	口径40.2	暗灰	細砂	良好	
68	2トレンチ	土壙－2	須恵器	蓋	口径(20.0)	灰白	微砂	良好	
69	2トレンチ	土壙－2	土師器	椀	高台径7.0	淡橙	細砂	不良	
70	5トレンチ	鍛冶炉　3	備前焼	杯	口径9.2、器高2.8	灰白	微砂	不良	
71	4トレンチ	土壙　4	弥生土器	壺	口径(外)24.6、(内)22.4	橙	細砂	良好	
72	4トレンチ	土壙－4	弥生土器	壺	口径16.0	淡灰褐	細砂	良好	
73	4トレンチ	土壙－4	弥生土器	甕	口径18.4	橙	細砂	良好	
74	4トレンチ	土壙－4	弥生土器	甕	口径18.2	淡黄褐	粗砂	良好	
75	4トレンチ	土壙－4	弥生土器	鉢	口径13.2、器高10.8、台径5.0、台高1.0	鈍い黄褐	粗砂	良好	
76	4トレンチ	土壙－4	弥生土器	鉢	口径10.4、器高8.7、底径2.9	鈍い黄褐	細砂	良好	
77	4トレンチ	土壙－4	弥生土器	鉢	口径(17.8)、器高5.9	淡橙	粗砂	不良	
78	4トレンチ	土壙－4	弥生土器	鉢	口径(41.2)	鈍い橙褐	微砂	良好	

（　）は推定値

79	4トレンチ	土壙－4	弥生土器	高杯	口径17.0	白	細砂	良好	
80	4トレンチ	土壙－4	弥生土器	高杯	口径12.3、器高17.0 脚径18.4	鈍い橙	細砂	良好	透し孔5
81	4トレンチ	土壙－4	弥生土器	器台	脚径28.8	白	細砂	良好	透し孔円4、 方3×4
82	11トレンチ	包含層	縄文土器	皿		(外)暗褐灰 (内)淡橙褐	粗砂	不良	
83	4トレンチ	包含層	弥生土器	器台		淡橙	微砂	不良	透し孔2
84	21トレンチ	包含層	軟質土器	甕手	長さ4.8	鈍い黄橙	粗砂	不良	
85	4トレンチ	包含層	須恵器	蓋		暗灰	微砂	良好	
86	4トレンチ	包含層	須恵器	蓋	口径13.1	灰	精緻	良好	
87	4トレンチ	包含層	須恵器	蓋	口径11.0、器高3.5	灰白	細砂	良好	
88	4トレンチ	包含層	須恵器	杯身		暗紫	細砂	良好	
89	4トレンチ	包含層	須恵器	杯身	口径16.0	灰白	微砂	良好	
90	4トレンチ	包含層	須恵器	高杯	脚径9.4	灰白	微砂	良好	
91	4トレンチ	包含層	須恵器	高杯		灰白	微砂	良好	
92	1トレンチ	講堂基壇東落	須恵器	平瓶		灰	微砂	良好	
93	4トレンチ	包含層	須恵器	壺		灰	微砂	良好	底部に記号
94	4トレンチ	包含層	須恵器	甕		灰白	精緻	良好	寒風窯産か
95	4トレンチ	包含層	須恵器	甕		暗青灰	微砂	良好	
96	4トレンチ	包含層	須恵器	甕		青灰	微砂	良好	
97	4トレンチ	包含層	須恵器	甕		暗紫灰	微砂	良好	
98	1トレンチ	講堂基壇北落	土師器	椀	高台径11.2、高台高1.9	橙	細砂	不良	
99	1トレンチ	講堂基壇北落	土師器	椀	高台径7.0	淡橙	細砂	不良	
100	5トレンチ	包含層	黒色土器	椀	高台径7.0	淡橙	細砂	良好	
101	5トレンチ	包含層	土師器	杯	口径6.6、器高3.9	橙	細砂	不良	
102	1トレンチ	土器溜まり1	土師器	杯	底径7.8	鈍い黄褐	粗砂	良好	
103	1トレンチ	講堂基壇東落	備前焼	椀	底径6.4	灰白	精緻	良好	底部に墨書
104	1トレンチ	講堂基壇東落	備前焼	椀	口径14.4、器高4.1 底径6.8	鈍い黄褐	粗砂	やや 不良	
105	1トレンチ	講堂基壇東落	備前焼	椀	口径13.4、器高4.0 底径7.2	鈍い黄褐	粗砂	やや 不良	
106	1トレンチ	包含層	備前焼	杯	口径12.6、器高2.4、 底径7.4	淡橙	細砂	不良	
107	1トレンチ	講堂基壇東落	備前焼	小皿	口径7.5、器高0.7～1.5 底径5.9	橙	細砂	やや 不良	
108	1トレンチ	講堂基壇東落	備前焼	小皿	口径7.4、器高1.4 底径4.8	青灰	細砂	良好	
109	1トレンチ	包含層	備前焼	擂鉢		暗灰	微砂	良好	
110	5トレンチ	包含層	備前焼	壺	口径11.4、底径12.2	灰	粗砂	良好	
111	5トレンチ	包含層	備前焼	壺		暗紫褐	細砂	良好	
112	3トレンチ	包含層	白磁	碗		白		良好	
113	5トレンチ	包含層	白磁	碗	底径6.8	白		良好	

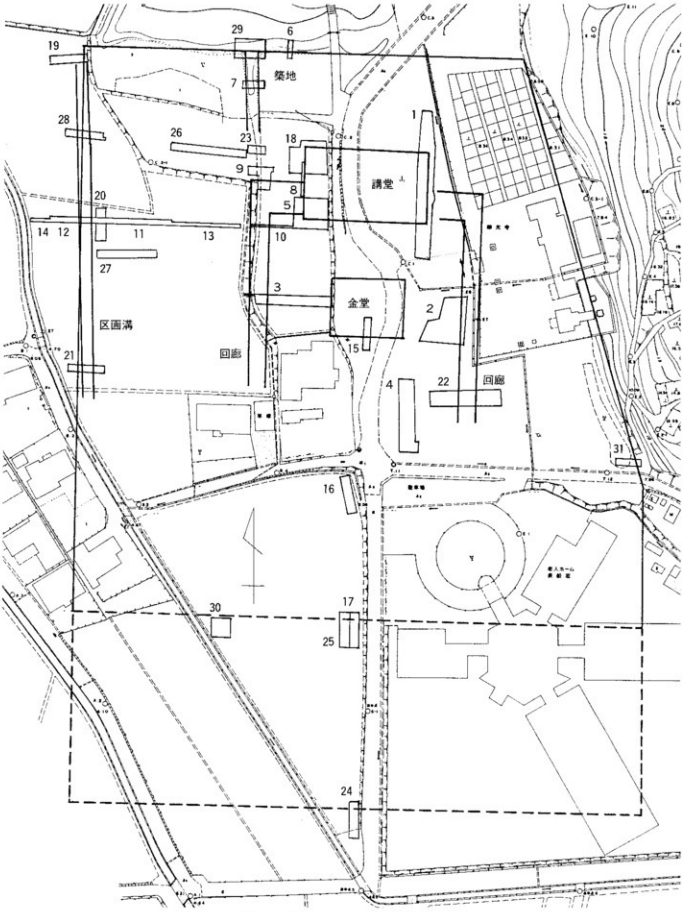
別表11　螺髪計測表

番号	分類	高さ	底径	形状	底穴	型使用	巻き方向	巻き数	備考
114	螺髪1	28	27	円錐形	無	使用	左巻き	5	金堂須弥壇上
115	螺髪2	27	26	円錐形	無	使用	左巻き	5	金堂須弥壇上
116	螺髪3	26	27	円錐形	無	使用	左巻き	5	金堂須弥壇上
117	螺髪4	27	29	円錐形	無	使用	左巻き	5	金堂須弥壇上
118	螺髪5	30	31	円錐形	無	使用	左巻き	5	金堂須弥壇上
119	螺髪6	30	(28)	円錐形	無	使用	左巻き	6	金堂須弥壇上
120	螺髪7	23	26	円錐形	無	使用	左巻き	4	金堂須弥壇上

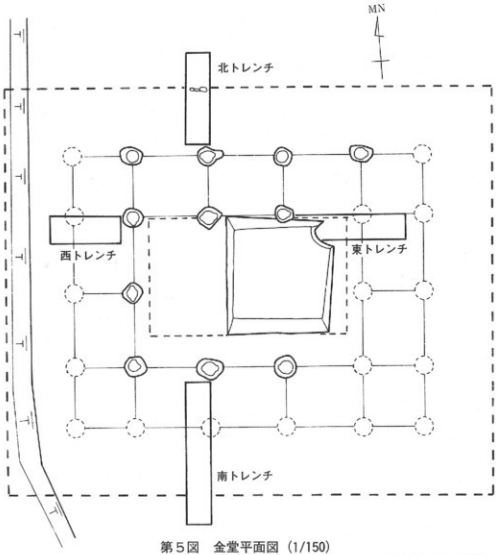
単位（㎜）（　）は推定値

別表12　その他の遺物計測表

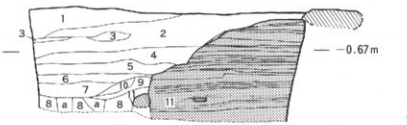
番号	調査区	遺構名	種別	材質	計量値(cm・g)	備考
121	3トレンチ	包含層	管状土錘	土	長3.6、幅1.0、孔径0.5、重3.5	
122	5トレンチ	雨落溝上層	羽口	土	長10.6、幅8.2、孔径2.8	先端に滓付着
123	2トレンチ	包含層	ナイフ形チャート	チャート	長3.3、幅2.5、厚1.0、重9.6	旧石器
124	1トレンチ	講堂基壇上面	砥石	頁岩	長4.3、幅5.1、厚0.7、重23.0	全面に擦痕
125	1トレンチ	包含層	火打金か	鉄	長6.9、幅5.4、厚2.0、重104.5	
126	1トレンチ	包含層	轡金具か	鉄	板長5.7、板幅2.3～1.8、鋲頭径8.0、鋲先径2.0、重19.1	
127	1トレンチ	包含層	釘	鉄	長3.6、幅0.4～0.45、重2.6	
128	1トレンチ	包含層	釘	鉄	長7.8、幅0.7～0.9、重33.9	
129	1トレンチ	瓦溜まり1	釘	鉄	長6.9、幅0.7～0.9、重24.5	
130	3トレンチ	包含層	釘	鉄	長6.5、幅0.65～0.35、重12.6	
131	1トレンチ	講堂基壇東落	釘	鉄	長7.8、幅0.8～1.2、重39.4	
132	5トレンチ	包含層	銭	銅	径2.35、厚0.1、重2.3	「□□元□」
133	5トレンチ	包含層	銭	銅	径2.5、厚0.1、重1.9	「永楽通宝」
134	1トレンチ	包含層	銭	銅	径2.5、厚0.1、重2.8	「天正元宝」
135	22トレンチ	包含層	銭	銅	径2.5、厚0.1、重1.9	「□□元□」
136	3トレンチ	包含層	耳環	銅芯金張	外径2.4、芯径0.4、重2.9	



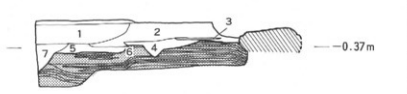
第４図　トレンチ配置図（1/1000）



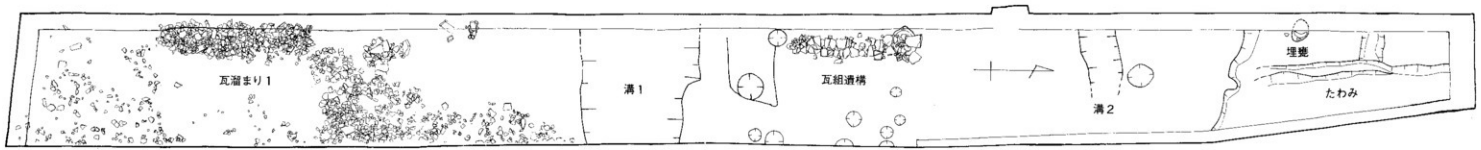
第５図　金堂平面図（1/150）



第６図　北トレンチ東壁断面図（1/50）

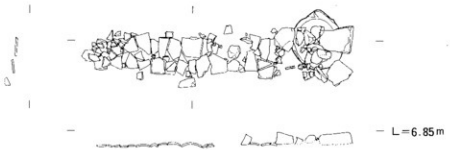


第７図　西トレンチ北壁断面図（1/50）

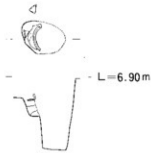


第８図　１トレンチ上層遺構平面図（1/100）

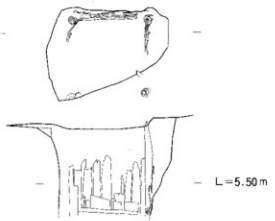
第９図　中世土器出土平面・断面図（1/50）



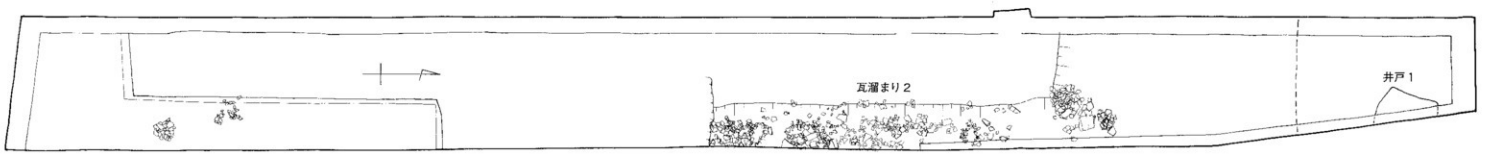
第10図　瓦組遺構平面・断面図（1/50）



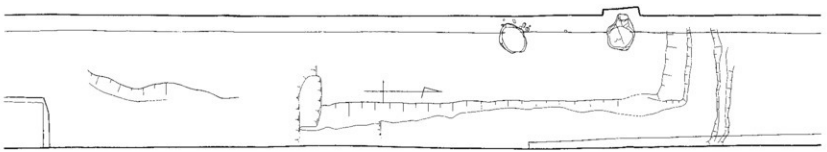
第11図　土壙１（埋甕）平面・断面図（1/50）



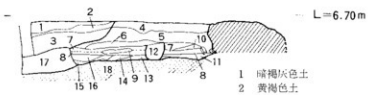
第12図　井戸１平面・断面図（1/50）



第13図　１トレンチ下層遺構平面図（1/100）

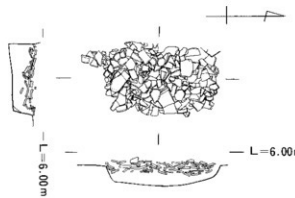


第14図　講堂基壇東端平面図（1/100）

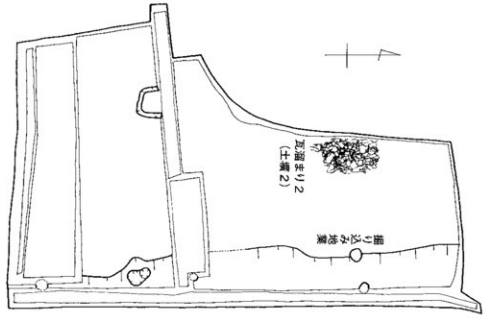


1　暗褐灰色土
2　黄褐色土
3　灰褐色土
4　灰褐色土（黄色地山ブロック多含）
5　にぶい黄褐色土
6　暗褐色土
7　にぶい黄褐色土
8　にぶい黄褐色土（7より暗い）
9　暗褐色土
10　暗黄褐色土
11　黄褐色土
12　黄灰色土（足場穴）
13　灰褐色土
14　黄褐色土
15　暗褐色土
16　にぶい黄褐色土
17　黒褐色土（黄色地山ブロック多含）
18　黒褐色土

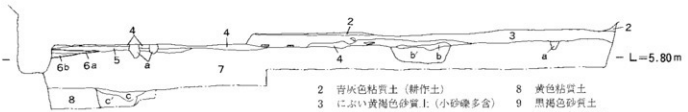
第15図　講堂基壇東端断面図（1/50）



第17図　土壙2　平面・断面図（1/50）

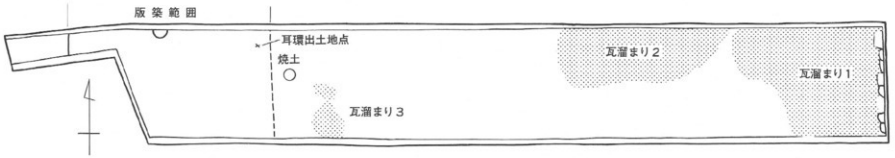


第16図　2トレンチ平面図（1/100）

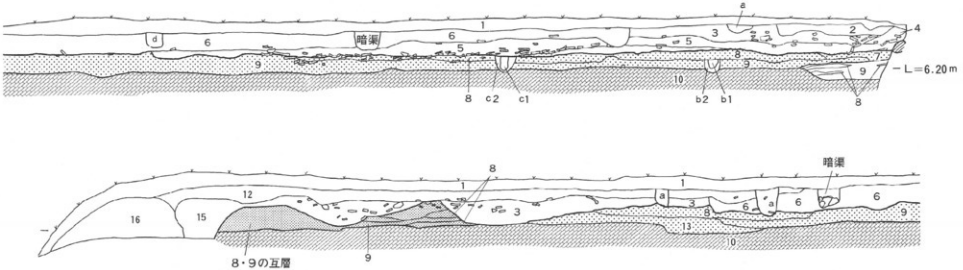


2　青灰色粘質土（耕作土）
3　にぶい黄褐色砂質土（小砂礫多含）
3　にぶい黄褐色砂質土
4　淡褐灰色砂質土
5　暗褐色粘性砂質土
6a　黄色粘質土（版築層）
6b　暗灰色粘質土
7　黒褐色粘質土
8　黄色粘質土
9　黒褐色砂質土
a　淡青灰色粘質土
b　灰色粘質土（小砂礫少含）
b'　褐灰色粘質土
c　淡灰色粘質土（黄色粘土微含）
c'　淡黄色粘質土

第18図　2トレンチサブトレンチ南壁断面図（1/50）

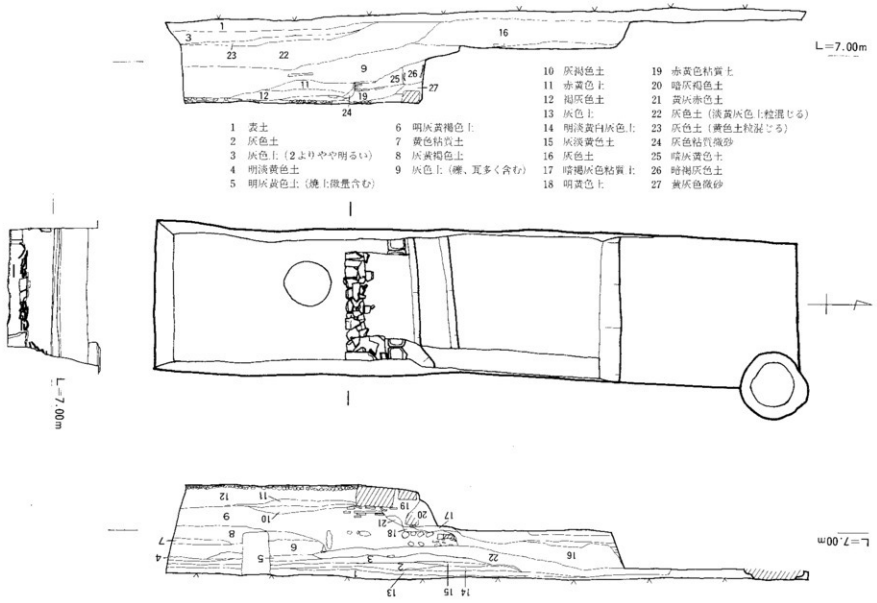


第19図　3トレンチ平面図（1/100）

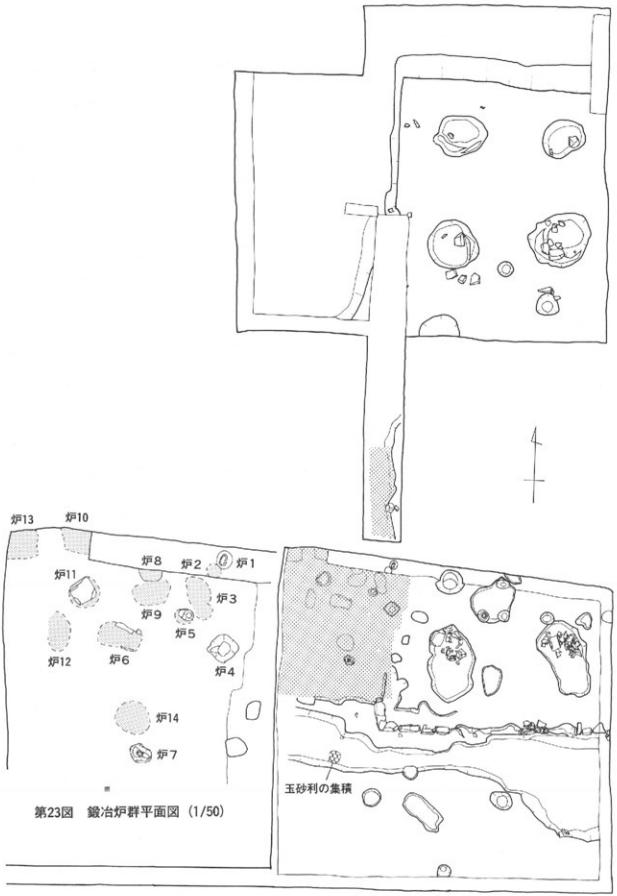


1　灰褐色土（耕作土）
2　灰褐色砂質土（カーボン・焼土微含）
3　灰褐色砂質土（カーボン・焼土多含）
4　にぶい黄色土（黄色地山ブロック多含）
5　灰黄色砂質土（黄色地山ブロック少含）
6　灰黄色砂質土（5より明るい）
7　明灰黄色砂質土（版築層）
8　暗灰褐色粘質土（版築層）
9　にぶい黄褐色粘性砂質土（版築層）
10　暗褐色粘質土（基盤）
11　黄色土（黄色地山ブロック多含）
12　褐灰色砂質土（締まり良い）
13　褐灰色砂質土（焼土微含）
14　黄褐色砂質土（締まり良い）
15　黄褐色砂質土（礫・瓦多含）
16　褐灰色砂質土（瓦・礫多含、造成土）
a　暗褐灰色砂質土
b1　褐灰色粘質土
b2　暗褐灰色粘質土
c1　灰褐色砂質土
c2　灰褐色砂質土（c1より明るい）
d　灰褐色土
造成土
旧地表
版築

第20図　3トレンチ北壁断面図（1/50）

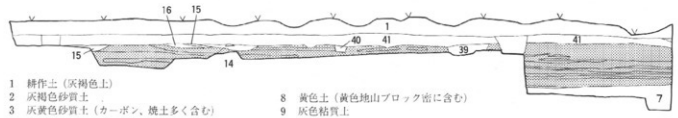


第21図　15トレンチ平面・断面図（1/50）



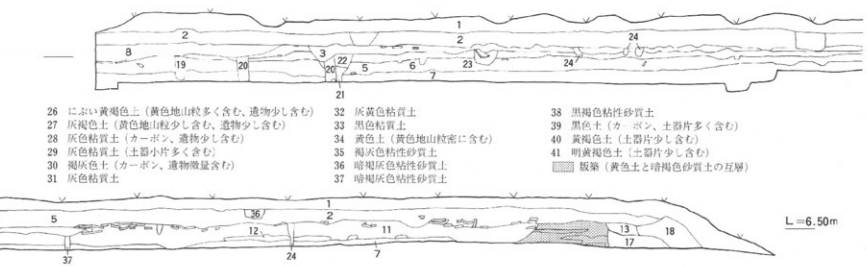
第23図　鍛冶炉群平面図（1/50）

第22図　5・8・10・18トレンチ平面図（1/100）



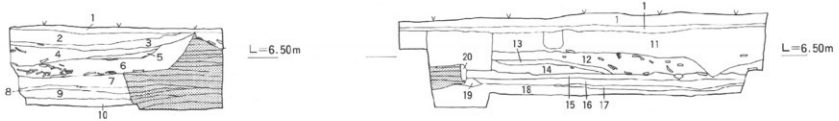
1 耕作土（灰褐色土）
2 灰褐色砂質土
3 灰黄色砂質土（カーボン、焼土多く含む）
4 明灰黄色砂質土
5 暗灰褐色粘質土
6 にぶい黄褐色粘性砂質土
7 暗褐色粘質土
8 黄色土（黄色地山ブロック密に含む）
9 灰色粘質土
10 黒色粘質土
11 黒褐色粘質土（瓦、土器片多く含む）
12 にぶい黄色土
13 褐灰色土
14 暗灰色粘性砂質土
15 橙色砂質土（受熱）
16 黄色地山土
17 褐灰色土
18 褐灰色土
19 にぶい黄褐色粘性砂質土
20 褐灰色粘性砂質土
21 灰褐色粘性砂質土
22 褐灰色粘性砂質土（カーボン微量含む）
23 にぶい灰黄色粘質土
24 灰褐色粘質土
25 暗灰褐色砂質土

第24図　5トレンチ東壁および北壁断面図（1/50）



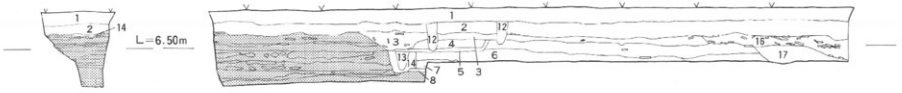
26 にぶい黄褐色土（黄色地山粒多く含む、遺物少し含む）
27 灰褐色土（黄色地山粒少し含む、遺物少し含む）
28 灰色粘質土（カーボン、遺物少し含む）
29 灰色粘質土（土器小片多く含む）
30 褐灰色土（カーボン、遺物微量含む）
31 灰色粘質土
32 灰黄色粘質土
33 黒色粘質土
34 黄色土（黄色地山粒密に含む）
35 褐灰色粘性砂質土
36 暗褐灰色粘性砂質土
37 暗褐灰色粘性砂質土
38 黒褐色粘性砂質土
39 黒色土（カーボン、土器片多く含む）
40 黄褐色土（土器片少し含む）
41 明黄褐色土（土器片少し含む）
▨ 版築（黄色土と暗褐色砂質土の互層）

第25図　10トレンチ南壁断面図（1/50）



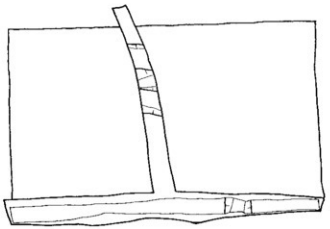
1 耕作土（床土を含む）
2 灰褐色微砂
3 灰淡黄色微砂
4 灰黄褐色土
5 灰褐色土
6 灰黄色土
7 黒褐色粘質土
8 黒褐色粘質土（黄色土粒混じる）
9 褐黄色土
10 暗褐黄色土
11 明黄灰色土
12 灰黄色土（黄色土粒混じる・瓦多く含む）
13 灰黄色土
14 灰淡黄色土
15 灰褐色粘土
16 明黄灰色土
17 黄灰色細砂
18 灰黄褐色粘土
19 黄灰色土（黄色土粒混じる）
20 灰色粘質土
版築（黒褐色粘土と黄灰色粘質土の互層）

第26図　18トレンチ東壁および南壁断面図（1/50）

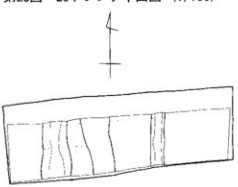


1 畑耕作土
2 灰黄色砂質土（焼土・カーボン少し含む）
3 灰褐色砂質土（土器片・瓦片少し含む）
4 にぶい黄褐色粘性砂質土
5 黄色土
6 にぶい黄褐色粘性砂質土
7 暗紫色粘性砂質土
8 黄褐色粘性砂質土
9 にぶい灰黄色土
10 暗灰炭色粘性砂質土
11 橙色砂質土（受熱）
12 暗灰褐色土
13 褐灰色砂質土
14 灰褐色砂質土
15 灰色粘土
16 褐灰色土（瓦多く含む、しまり悪い）
17 灰褐色土（1㎜前後の砂粒多く含む）
版築（黄褐色砂質土と暗灰褐色粘質土の互層）

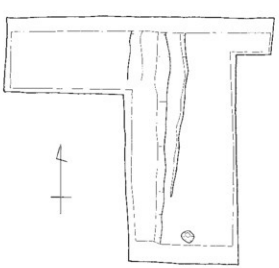
第27図　8トレンチ南壁および西壁断面図（1/50）



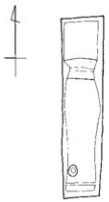
第28図　29トレンチ平面図（1/100）



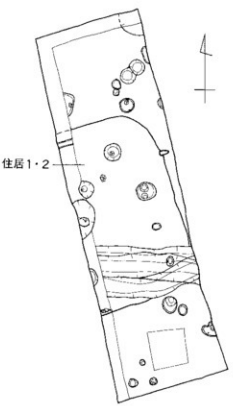
第29図　7トレンチ平面図（1/100）



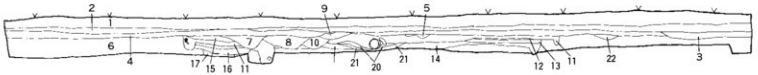
第30図　9トレンチ平面図（1/100）



第31図　6トレンチ平面図（1/100）

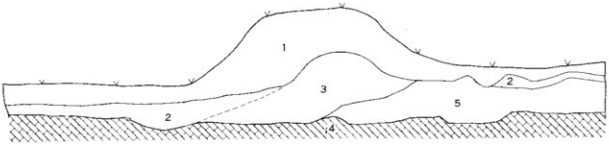


第32図　16トレンチ平面図（1/100）



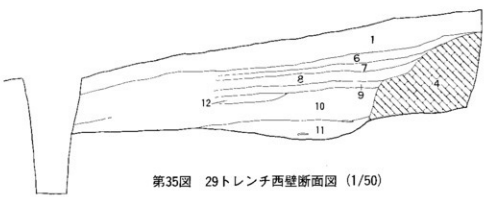
1 水田耕作土
2 水田床土
3 明灰褐色土
4 灰青色粘質土
5 灰淡黄色微砂
6 黄灰色粘質土
7 灰黄色粘質土
8 灰褐色土
9 灰淡黄褐色粘質土
10 灰褐色土（8よりやや暗い）
11 灰褐色土（黄色土粒混じる）
12 黄色土
13 灰褐色粘質微砂
14 灰褐色粘質微砂（黄色土ブロック混じる）
15 灰褐色土（黄色土粒混じる）
16 褐灰色土
17 褐灰色土（黄灰色粘質土混じる）
18 褐灰色土（黄色土粒少量混じる）
19 黄灰色粘質土（褐灰色土ブロック混じる）
20 灰色土
21 褐灰色土（炭化物、灰多く含む）
22 暗灰褐色土

第33図　16トレンチ西壁断面図（1/50）

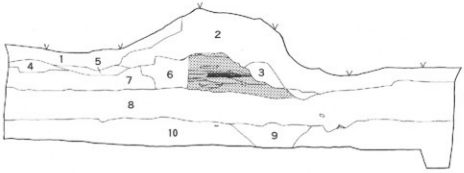


第34図　29トレンチ南壁断面図（1/50）

1 黄灰色土（表土含む）
2 淡黄色土
3 淡黄色土（2よりしまりない）
4 黄色土（地山）
5 暗黄褐色土
6 暗灰色土（よくしまっている）
7 灰白色土
8 明灰色土
9 灰淡黄色土
10 淡黄色土
11 暗灰黄色土
12 灰白色土

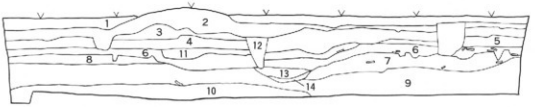


第35図　29トレンチ西壁断面図（1/50）



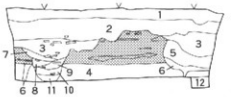
1　表土
2　明黄色土（竹根による撹乱層）
3　明黄色土（2よりやや粘性がある）
4　灰緑色土（橙色の粒少し含む）
5　にぶい黄色土
6　明黄色土（2より粘性強い）
7　暗褐灰色土（しまり悪い）
8　褐灰色土（カーボン・土器小片少し含む、しまり悪い）
9　暗褐灰色土
10　暗紫色粘質土
▨　版築（黄色砂と紫色土の互層）

第36図　7トレンチ北壁断面図（1/50）



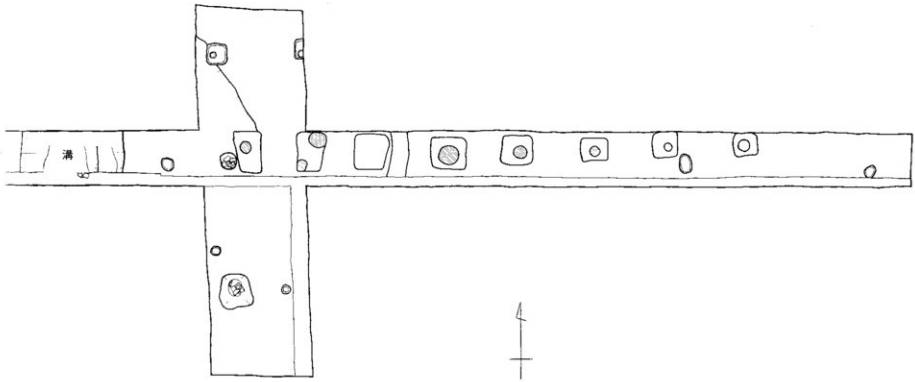
1　畑耕作土（暗褐灰色土）
2　褐灰色土（カーボン・土器小片少し含む、しまり悪い）
3　褐灰色土（しまり良い）
4　褐灰色土（2，3より暗い）
5　暗褐灰色土（しまり良い）
6　暗褐灰色土（瓦少し含む、しまり良い）
7　黒褐色粘質土（5mm前後の砂粒多く含む、しまり非常に悪い）
8　暗褐灰色土
9　黒褐色粘質土（瓦少し含む）
10　黒褐色粘質土（しまり良い）
11　灰褐色土
12　灰褐色土
13　褐灰色土（Mn多く含む）
14　灰色粘質土

第37図　9トレンチ北壁断面図（1/50）



1　畑耕作土（暗褐灰色土）
2　褐灰色土（カーボン・土器小片少し含む、しまり悪い）
3　褐灰色土（瓦多く含む）
4　暗灰褐色粘質土（黄色地山砂粒多く含む）
5　褐灰色土（Mn多く含む）
6　灰色粘質土
7　暗褐灰色粘質土（カーボン、焼土多く含む）
8　暗褐灰色粘質土（9より明るい）
9　灰褐色土
10　灰色粘質土
11　灰褐色粘性砂質土（細砂）
12　黒褐色粘質土
▨　版築（黒色粘性砂質土と橙色砂質土の互層）

第38図　9トレンチ南壁断面図（1/50）



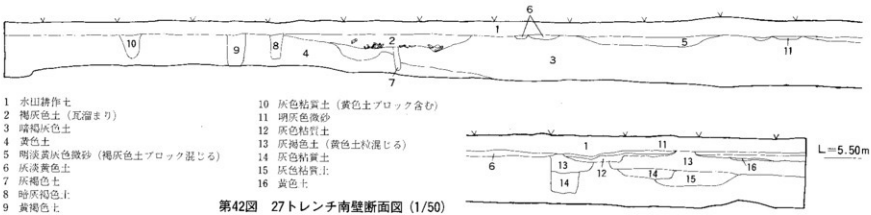
第39図　11・20・27トレンチ平面図（1/100）

1 水田耕作土
2 黄色砂
3 水田床土（褐色土）
4 灰色粘質土
5 灰色粘質土（4より やや暗い）
6 灰色粘質土（5より暗い）
7 暗褐灰色粘質土
8 黄色粘性砂質土
9 暗灰褐色粘質土（黄色地山ブロック含む）
10 暗灰褐色粘質土
11 灰褐色粘質土（カーボン・土器・瓦含む）
12 褐灰色粘質土（黄色地山ブロック少し含む）
13 暗黄褐色粘質土

第40図　11トレンチ南壁断面図（1/50）

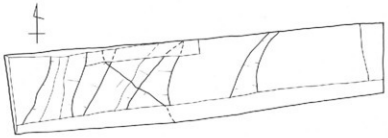
1 水田耕作土
2 水田床土
3 灰褐色土
4 灰淡黄色微砂
5 暗灰色土
6 灰色土
7 黄褐灰色土
8 灰黄色粘質土
9 黄褐色微砂
10 橙色微砂
11 暗褐灰色土

第41図　20トレンチ東壁断面図（1/50）



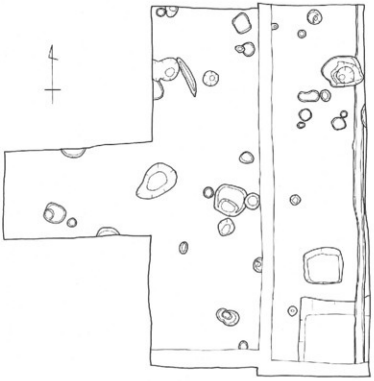
1 水田耕作土
2 褐灰色土（瓦溜まり）
3 暗褐灰色土
4 黄色土
5 明淡黄灰色微砂（褐灰色土ブロック混じる）
6 灰淡黄色土
7 灰褐色土
8 暗灰褐色土
9 黄褐色土
10 灰色粘質土（黄色土ブロック含む）
11 明灰色微砂
12 灰色粘質土
13 灰褐色土（黄色土粒混じる）
14 灰色粘質土
15 灰色粘質土
16 黄色土

第42図　27トレンチ南壁断面図（1/50）

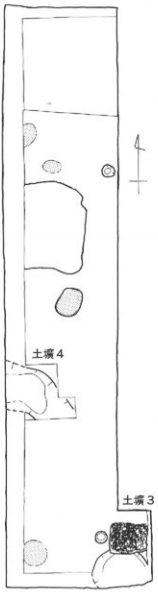


第43図　19トレンチ平面図（1/100）

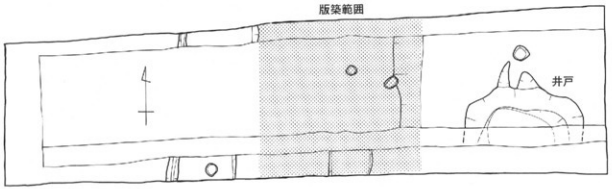
第44図　21トレンチ平面図（1/100）



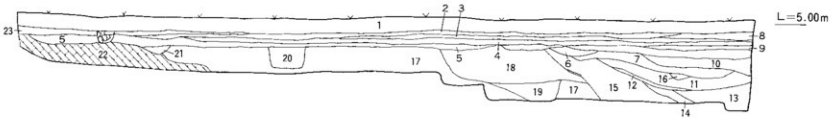
第45図　17・25トレンチ平面図（1/100）



第46図　4トレンチ平面図
（1/100）

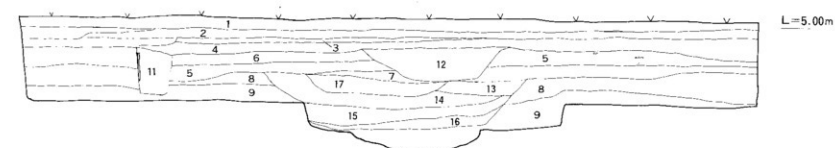


第47図　22トレンチ平面図（1/100）



1 水田耕作土
2 灰白色粘質微砂（暗褐色土ブロック混じる）
3 灰色土
4 灰淡黄色土
5 灰色土（黄色土粒多く含む）
6 暗褐灰色土（黄色土粒含む）
7 暗褐灰色土（黄色土粒少量含む）
8 灰白色粘質微砂
9 明灰褐色土
10 褐灰色土（黄色土粒少量含む）
11 暗褐色土（黄色土粒含む）
12 褐色微砂
13 青灰色粘土
14 明灰色砂
15 灰黄褐色粘質微砂
16 灰色砂
17 黄灰色微砂
18 暗灰色土（黄色土粒極少量含む）
19 暗灰褐色土
20 灰淡黄色微砂（黄色土粒極少量含む）
21 灰色土（淡黄色土混じる）
22 橙色土（礫多く混じる）
23 褐灰色土

第48図　19トレンチ南壁断面図（1/50）

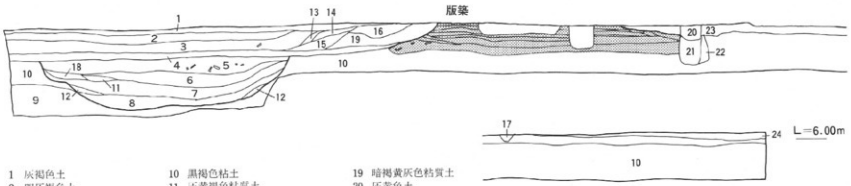


1 水田耕作土
2 水田床土
3 明白灰色土
4 灰淡黄色微砂（Mn 含む）
5 灰褐色粘質微砂
6 灰色土（暗灰褐色ブロック多く含む）
7 灰色微砂
8 灰黄色微砂（Mn 含む）
9 黄色微砂
10 淡黄色土（暗灰褐色ブロック混じる）
11 暗灰色細砂（粘質土混じる）
12 明灰淡黄色粘質微砂
13 暗灰褐色土
14 灰褐色粘質微砂
15 淡黄灰色微砂
16 暗灰色粘土
17 灰黄褐色粘質微砂

第49図　21トレンチ北壁断面図（1/50）

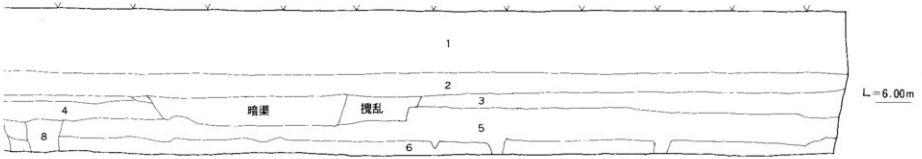
1 水田耕作土
2 水田床土
3 灰褐色微砂
4 黄色粘質微砂
5 灰黄色微砂
6 褐色微砂

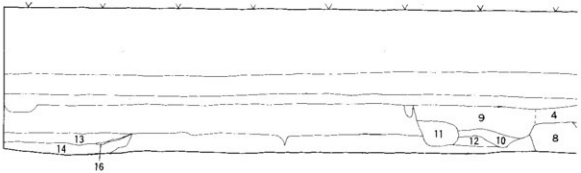
第50図　17トレンチ西壁断面図（1/50）



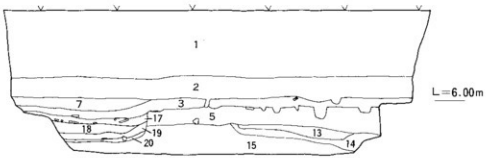
1 灰褐色土
2 明灰褐色土
3 褐灰色土
4 灰褐色土
5 灰褐色土（瓦片多く含む）
6 灰黄褐色粘質土
7 灰黄色粘質土
8 灰色粘土
9 淡黄灰色粘土
10 黒褐色粘土
11 灰黄褐色粘質土
12 黒褐色粘土（10より粘性弱い）
13 黄色土
14 灰褐色粘質土
15 黒褐灰色粘質土
16 暗褐黄色粘質土
17 灰白色粘質土
18 黒褐色粘質土
19 暗褐黄灰色粘質土
20 灰黄色土
21 暗灰黄褐色土
22 灰色粘質土
23 黄灰色粘質土
24 灰褐色微砂
▨ 版築（黒褐色粘土と黄色粘質土の互層）

第51図　22トレンチ南壁断面図（1/50）



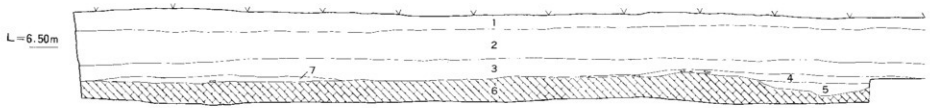


1 造成土
2 旧水田耕作土
3 にぶい黄褐色砂質土
4 黒褐色粘質土
5 黒褐色粘質土（4よりやや明るい）
6 黄色粘質土
7 にぶい黄褐色粘質土（黒色粒土ブロック含む）
8 黒褐色粘質土（黄色地山ブロック多く含む）
9 褐灰色土
10 暗褐灰色粘質土
11 黒褐色粘質土（土器多く含む）
12 にぶい黄色粘質土（しまり悪い）
13 褐灰色土
14 にぶい黄褐色粘質土
15 暗褐灰色粘質土
16 焼土層
17 にぶい黄褐色土（しまりが良い）
18 褐灰色粘質土
19 暗褐灰色粘質土
20 灰色粘土

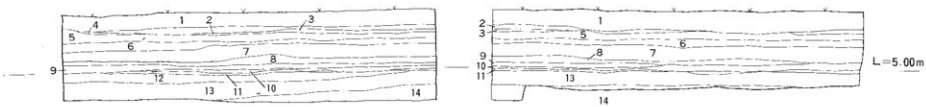


第52図　4トレンチ西壁および南壁断面図（1/50）

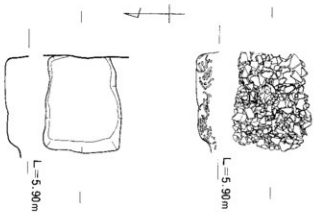
第53図　24トレンチ東壁断面図（1/50）



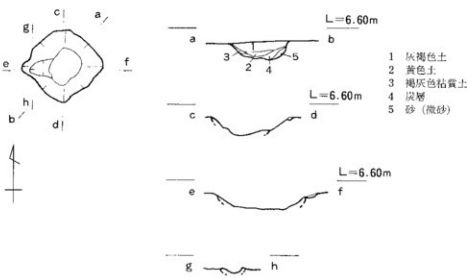
第54図　26トレンチ北壁断面図（1/50）



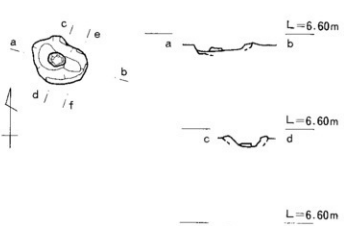
第55図　30トレンチ西壁および北壁断面図（1/50）



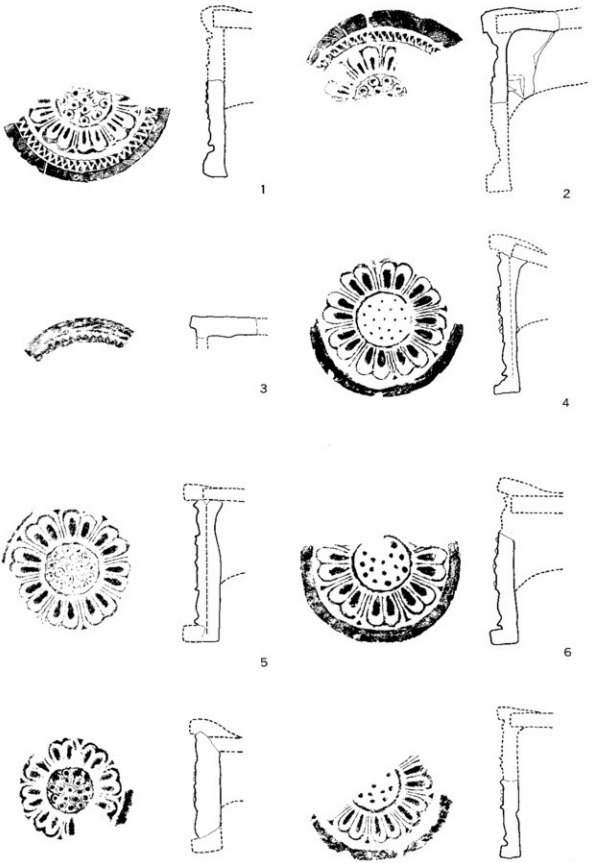
第56図　土壙３平面・断面図（1/50）



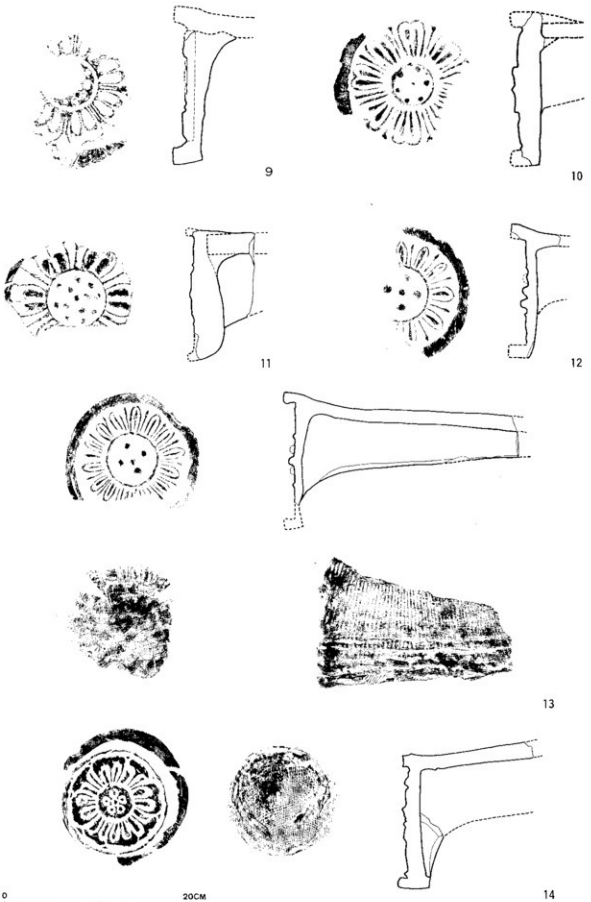
第57図　鍛冶炉４平面・断面図（1/50）



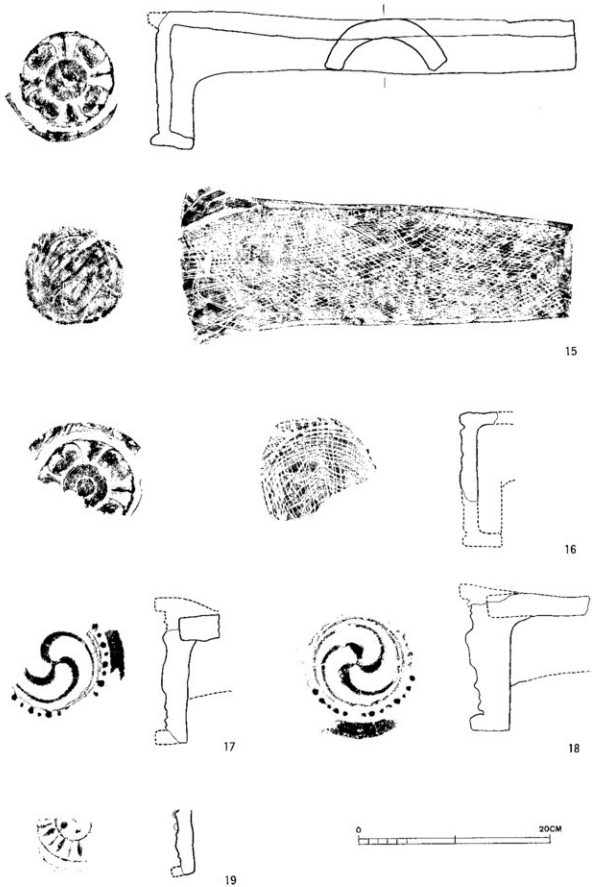
第58図　鍛冶炉７平面・断面図（1/50）



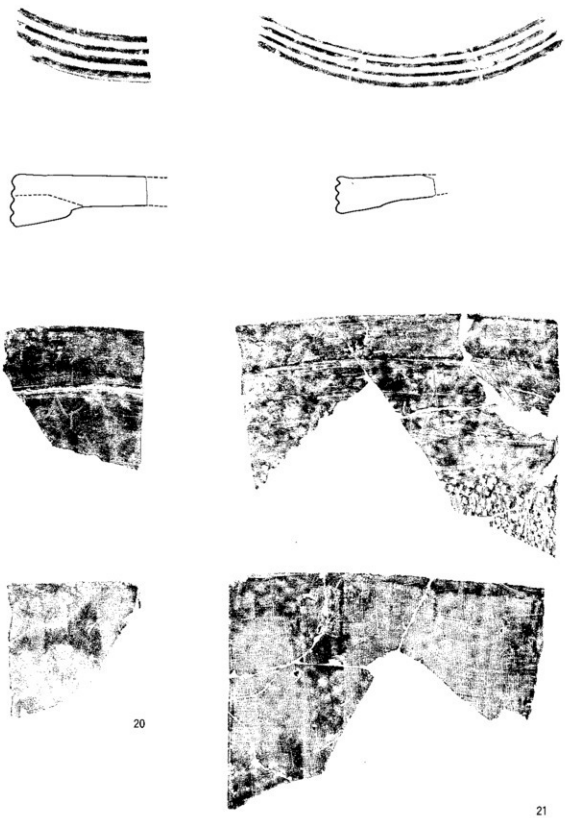
第59図　軒丸瓦（1）



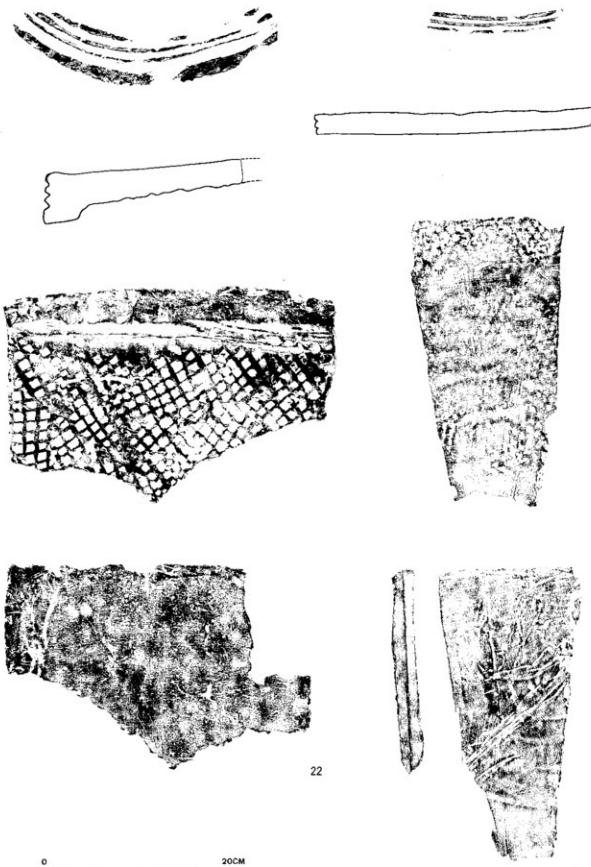
第60図　軒丸瓦（2）



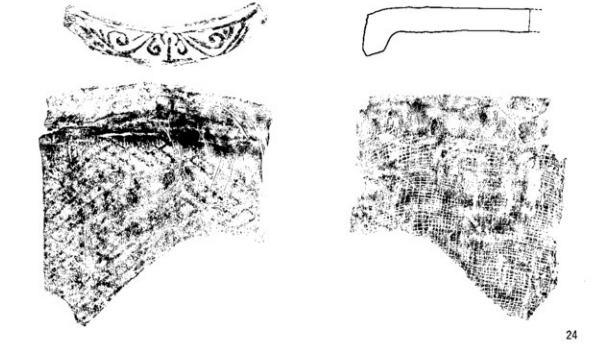
第61図　軒丸瓦（3）

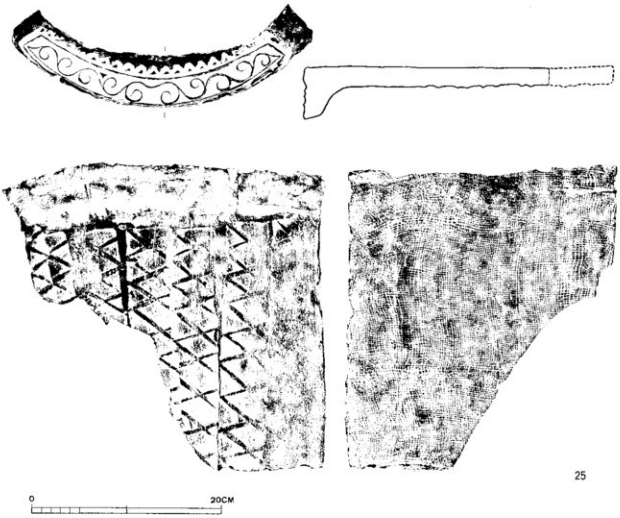


第62図　軒平瓦（1）



第63図　軒平瓦（2）





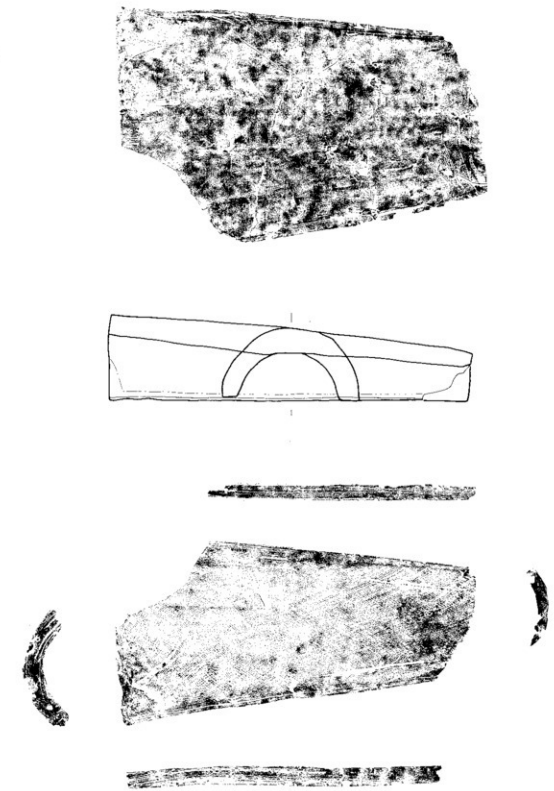
第64図　軒平瓦（3）

26

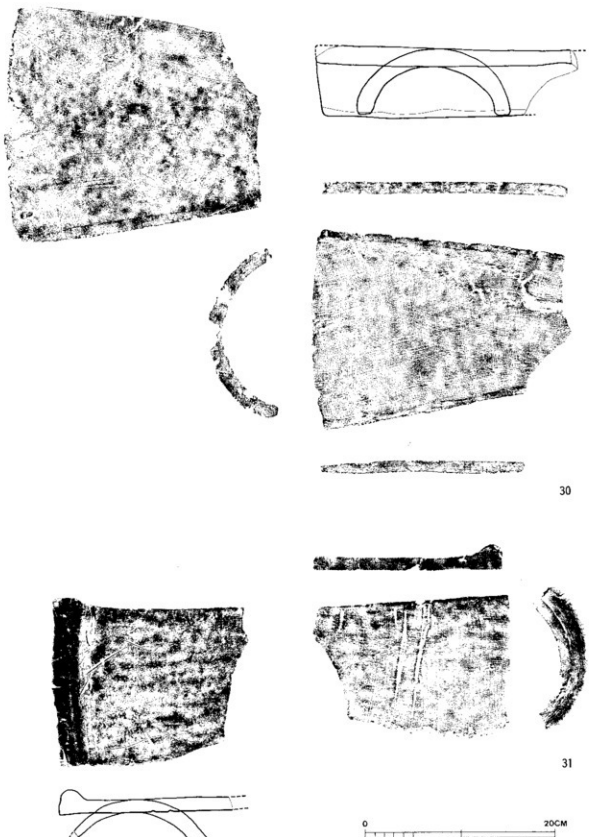
27

28

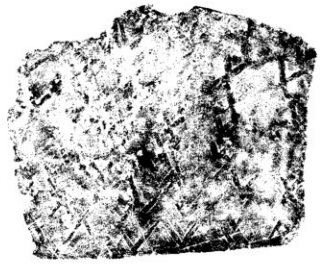
第65図　軒平瓦（4）

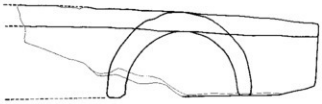


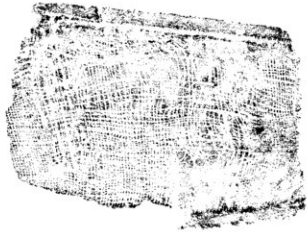
第66図　丸瓦（1）



第67図　丸瓦（2）



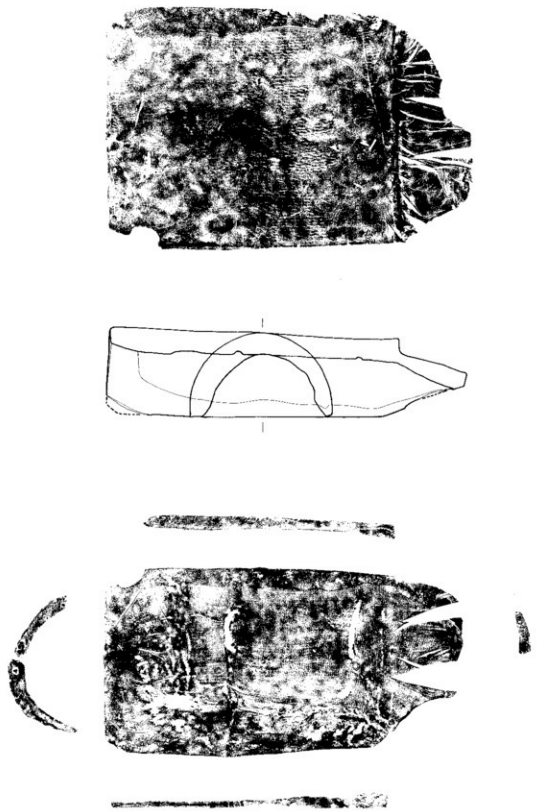




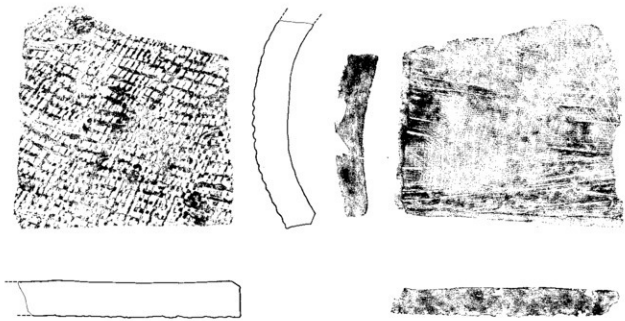
32

0 20CM

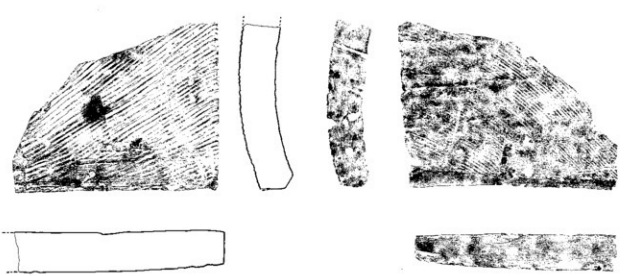
第68図　丸瓦（3）



第69図　丸瓦（4）



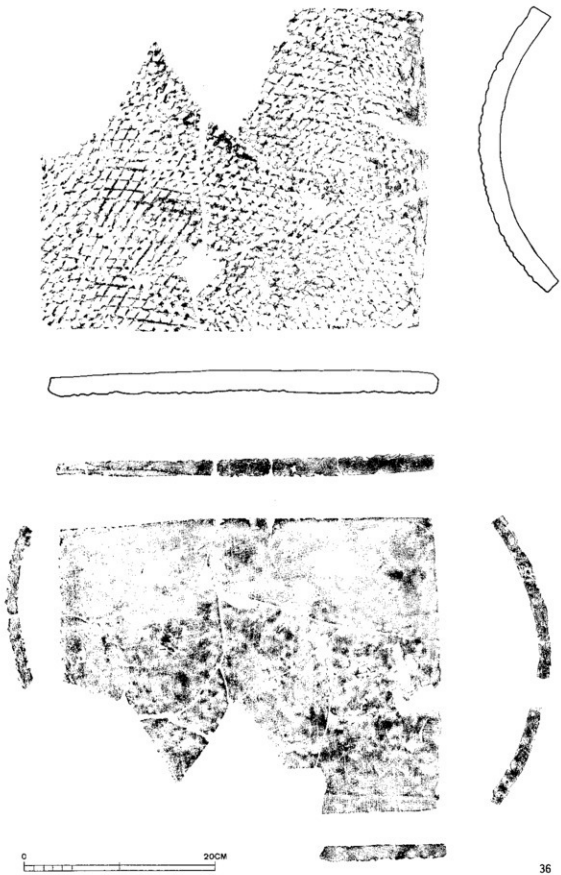
34



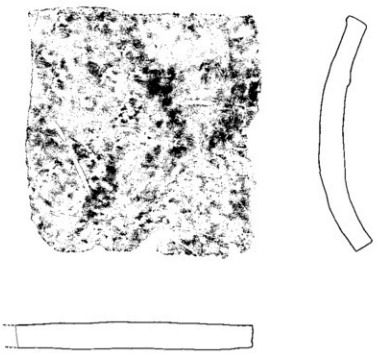
35

0 20CM

第70図　平瓦（1）



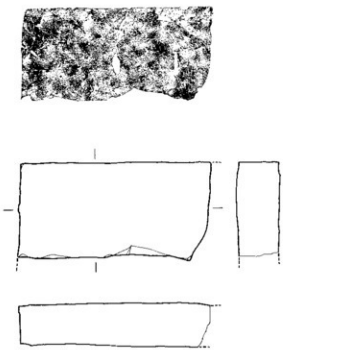
第71図　平瓦（2）



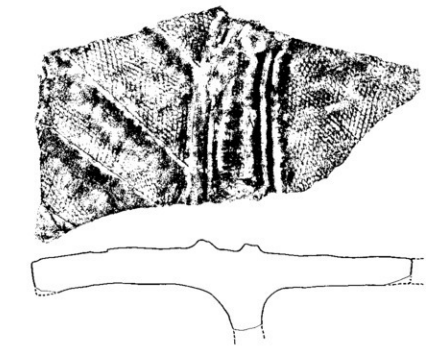
37

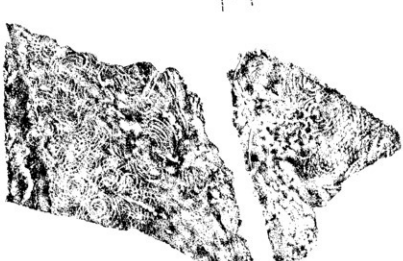
0 20CM

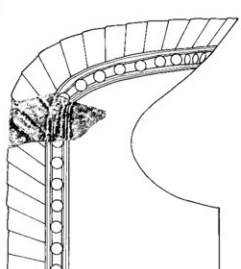
第72図　平瓦（3）



第73図　埴

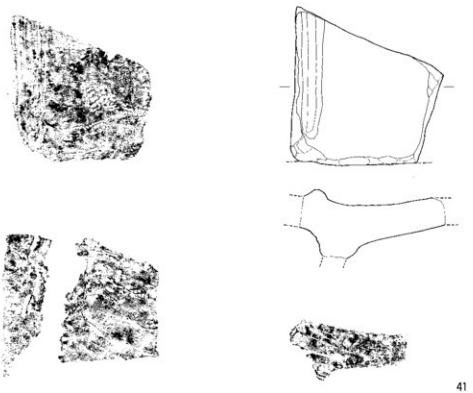






鴟尾復元模式図
(1/16)

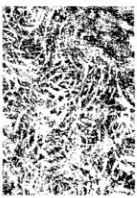
第74図　鴟尾（1）



0 20CM

第75図　鴟尾（2）・鬼瓦

1．



2．（40 鴟尾 1）

3．

4．（34 平瓦 A）

5．

6．（22 軒平瓦２類）

7．（35 平瓦Ｂ）

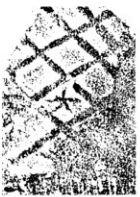
8．

第76図　瓦類タタキの原体　(1)（1/2）

9.

10.

11.



12.

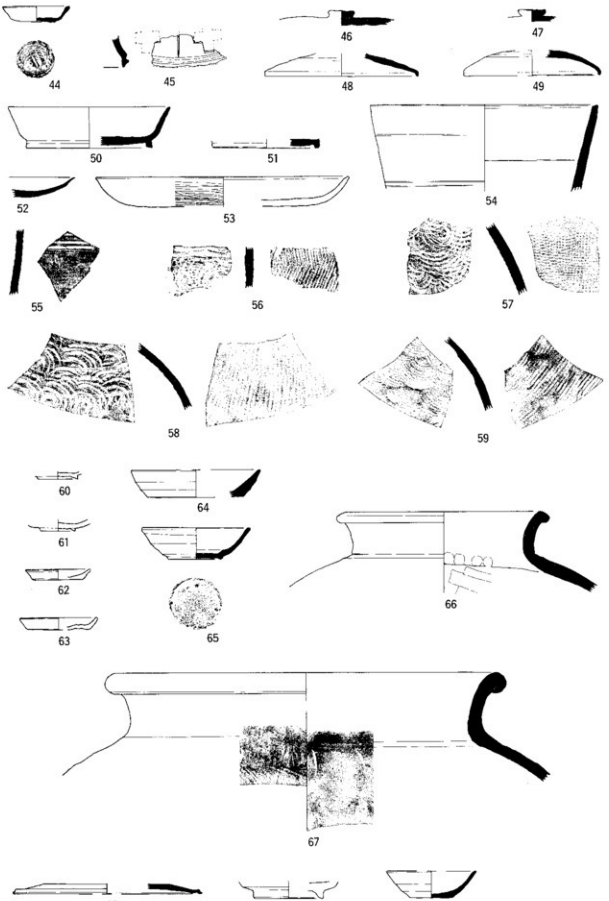
13. (25 軒平瓦5類)

14.

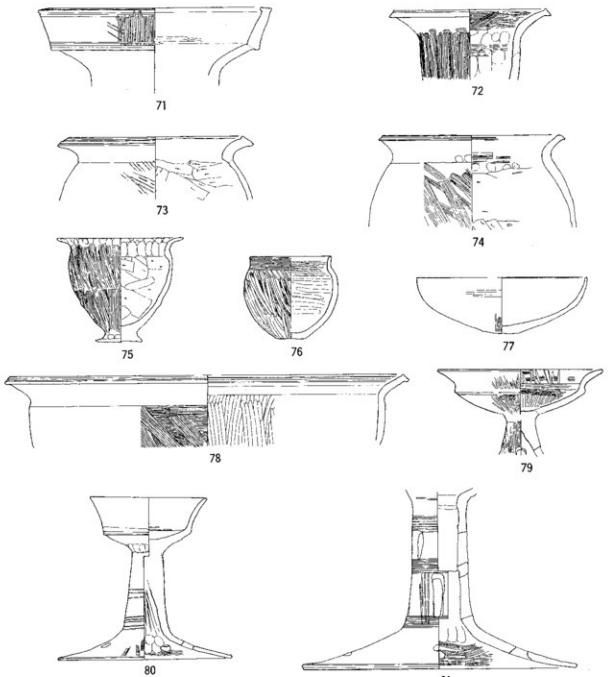
15.

16.

第77図　瓦類タタキの原体　(2)　(1/2)

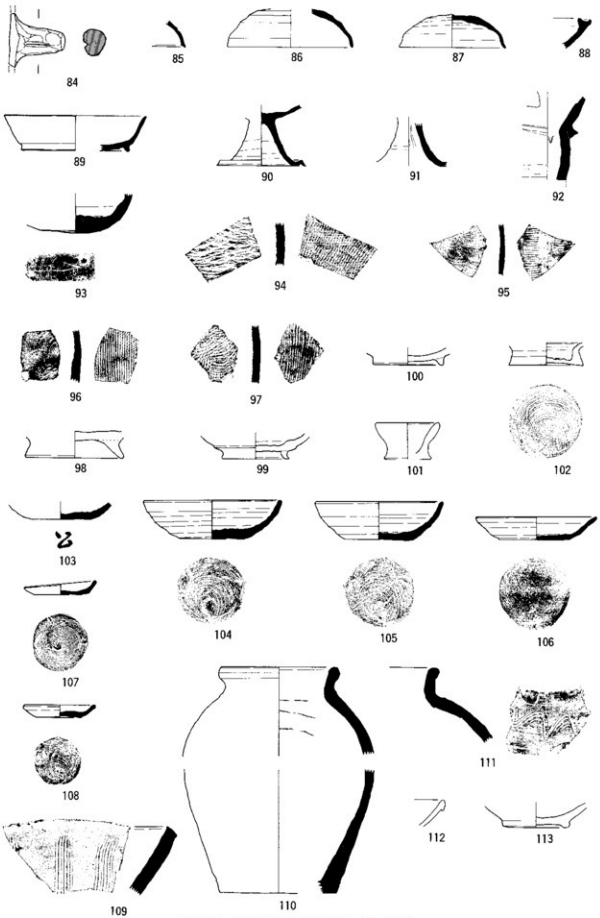


第78図　遺構に伴う土器（1）（1/4）

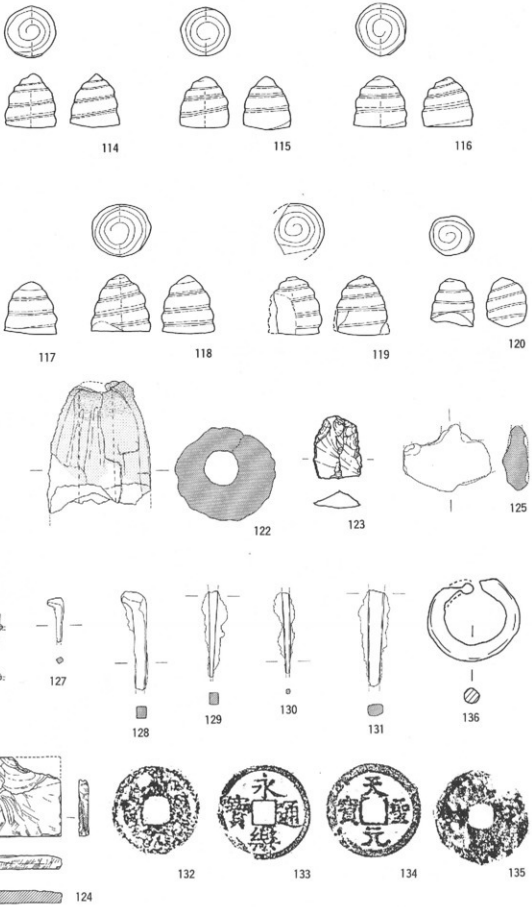


第79図　遺構に伴う土器（2）（1/4）

第80図　遺構に伴わない土器（1）（1/4）



第81図　遺構に伴わない土器（2）(1/4)



第82図　その他の遺物（122は1/3・133～135は1/1・他は1/2）

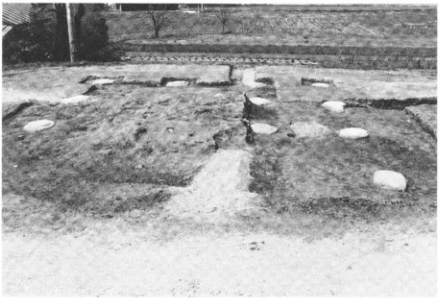
図版１

服部廃寺近景
（昭和40年頃）
（西から）

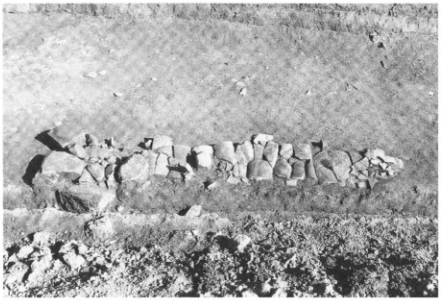
図版２

服部廃寺近景
（平成８年）
（西から）

図版３



金堂礎石検出状況
（東から）



図版４

１トレンチ講堂基檀北東瓦組遺構　（西から）

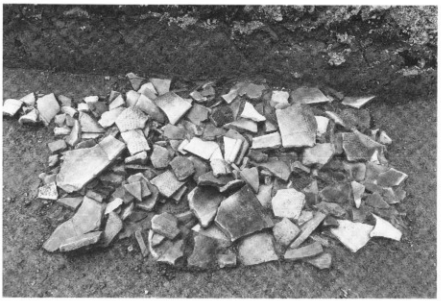
図版５

１トレンチ講堂基檀南東瓦溜まり１
（南から）

図版６

１トレンチ井戸１
（南から）

図版７



２トレンチ土壙２

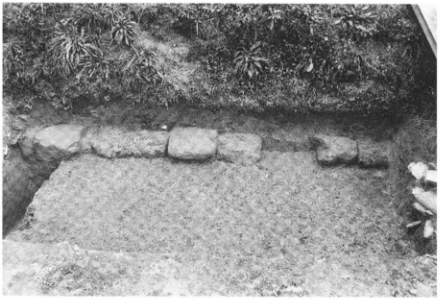
（東から）

図版８

３トレンチ瓦溜まり検出状況

（東から）

図版９

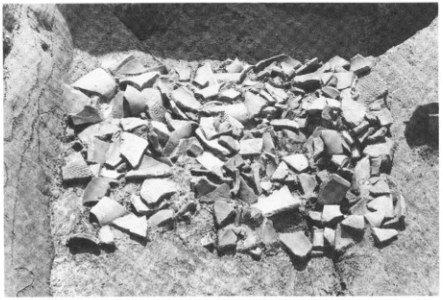


３トレンチ金堂西端基壇地覆石検出状況

（西から）

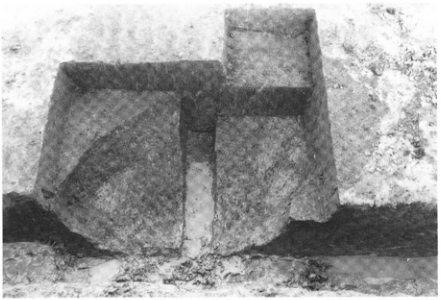
図版10

4トレンチ完掘状況
（南から）



図版11

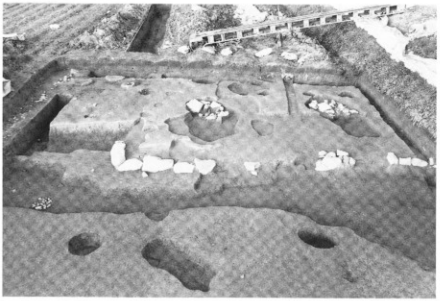
4トレンチ土壙３
（北から）



図版12

4トレンチ土壙４
（西から）

図版13

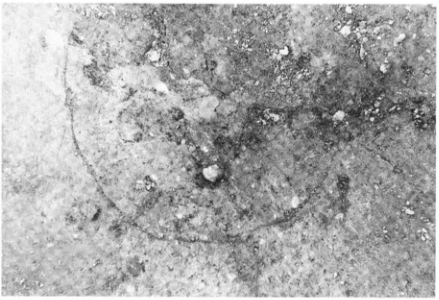


５トレンチ講堂基壇南西完掘状況
（南から）

図版14

５トレンチ鍛冶炉群検出状況
（東から）

図版15



５トレンチ鍛冶炉３検出状況
（東から）

図版16

5トレンチ鍛冶炉4
断面
（南東から）

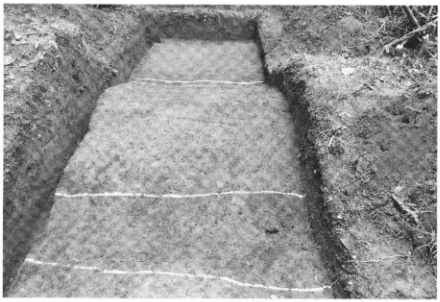
図版17

5トレンチ鍛冶炉7
完掘状況
（東から）

図版18

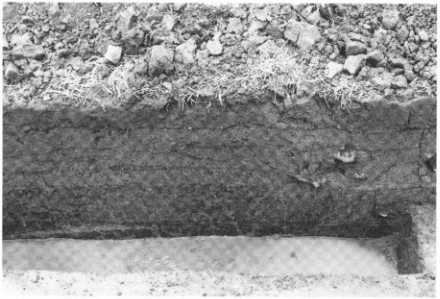
6トレンチ西壁断面
（東から）

図版19



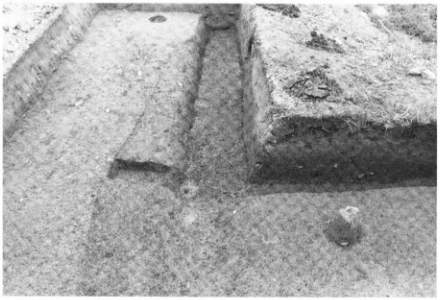
7トレンチ築地完掘状況
（西から）

図版20

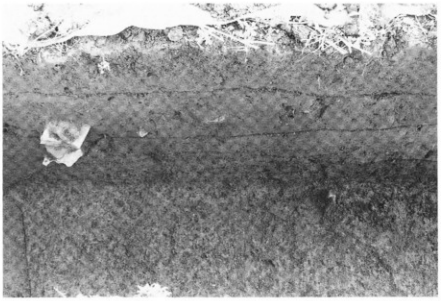


8トレンチ西回廊西壁断面

図版21

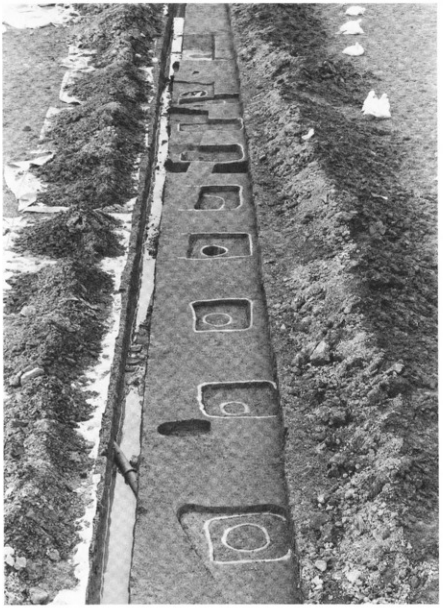


9トレンチ完掘状況
（東から）



図版22

10トレンチ南壁断面
（北から）



図版23

11・12トレンチ西側建物
検出状況
（東から）

図版24

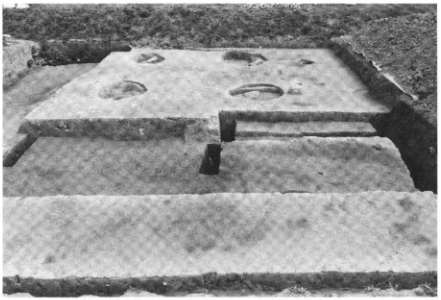
15トレンチ金堂階段完掘状況
（南から）

図版25

16トレンチ完掘状況
（北から）

図版26

17トレンチ完掘状況
（北から）

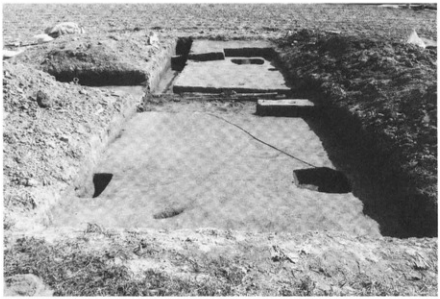


図版27

18トレンチ講堂基壇北西
完掘状況
（西から）

図版28

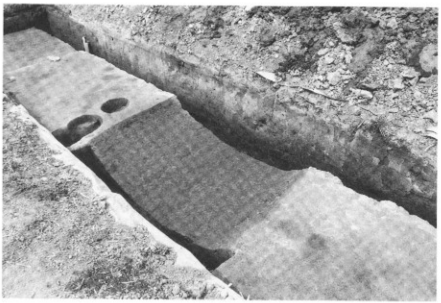
19トレンチ完掘状況
（北東から）



図版29

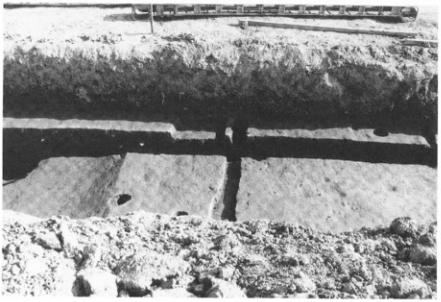
20トレンチ西側建物完掘
状況
（北から）

図版30



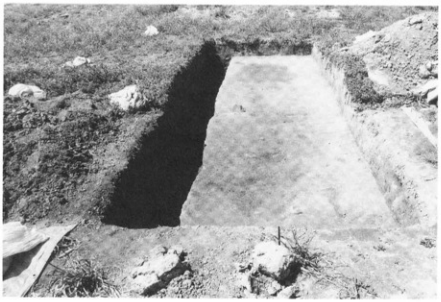
21トレンチ溝完掘状況
（南東から）

図版31



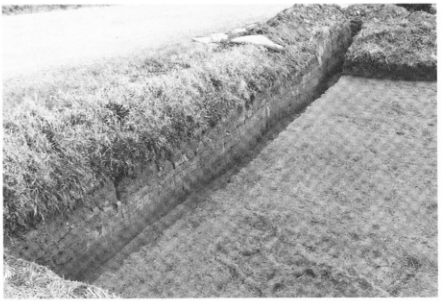
22トレンチ版築検出状況
（北から）

図版32



23トレンチ完掘状況
（東から）

図版33



24トレンチ完掘状況
（北西から）

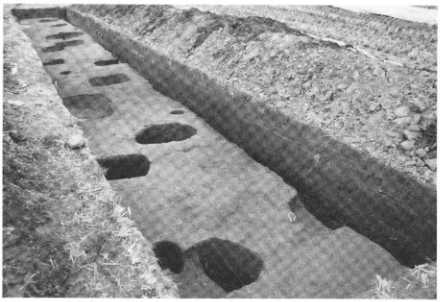
図版34

25トレンチ完掘状況
（北から）

図版35

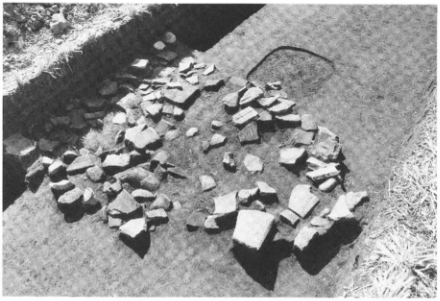
26トレンチ完掘状況
（西から）

図版36



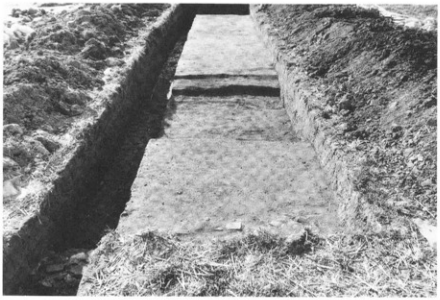
27トレンチ西側建物完掘状況
（北西から）

図版37

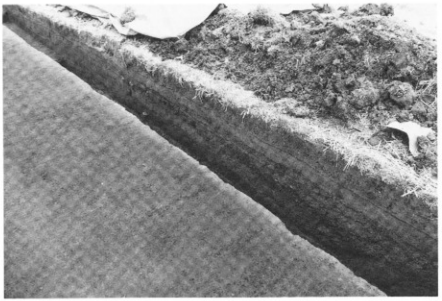


27トレンチ瓦溜まり
（北東から）

図版38



28トレンチ完掘状況
（東から）

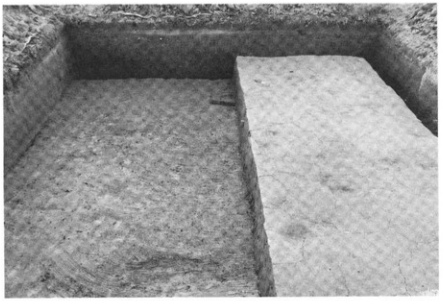


図版39

28トレンチ南壁断面
（北西から）

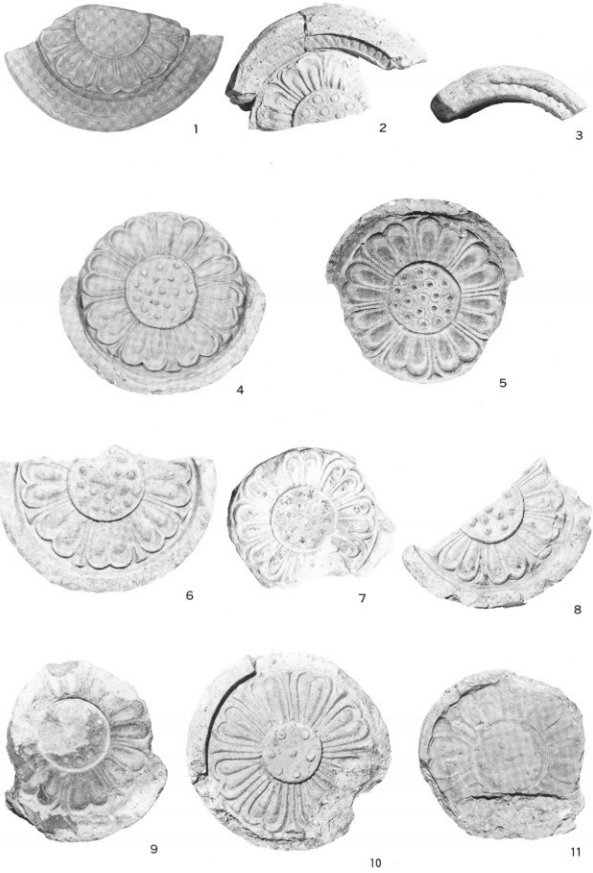
図版40

29トレンチ築地南壁断面
（北から）



図版41

30トレンチ完掘状況
（東から）



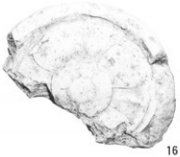
図版42　軒丸瓦（1）（1/3）

13

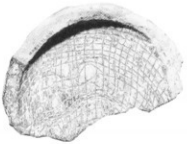
12

14

15



16

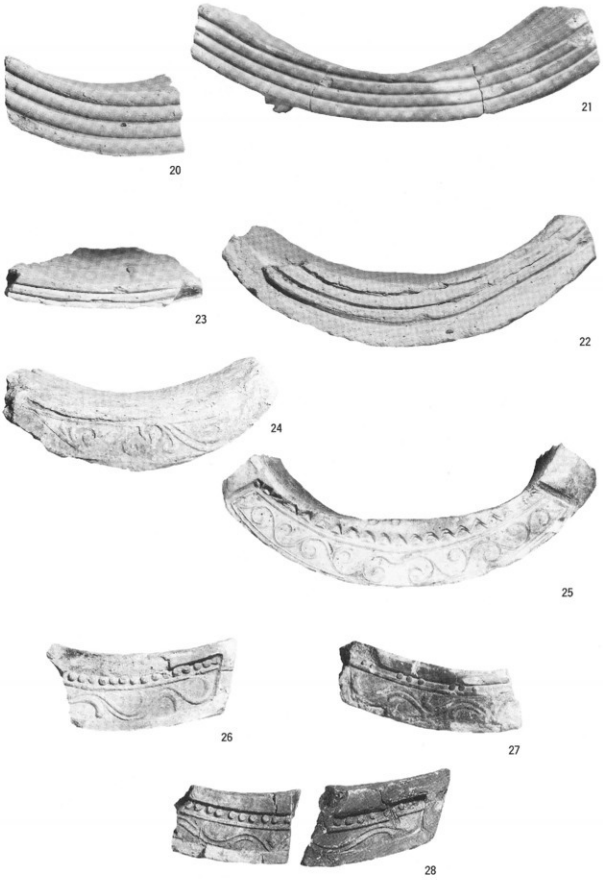


17

18

19

図版43　軒丸瓦（2）（1/3）



図版44　軒平瓦 (1/3)

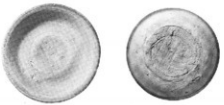
40

41

42

43

図版45　鴟尾・鬼瓦　(1/3)



44

50

45

46

51

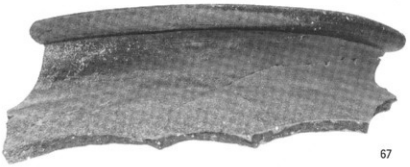
53

61

66

62

65



67

図版46　遺構に伴う土器（1）（1/3）

68

76

80

71

77

81

73

75

図版47　遺構に伴う土器（2）（1/3）

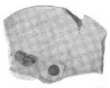
105

106

90

107

91



86

87

110

図版48　遺構に伴わない土器（1）（1/3）

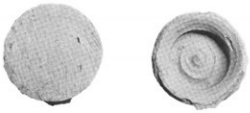
82

104

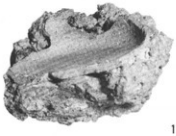
85

115

111

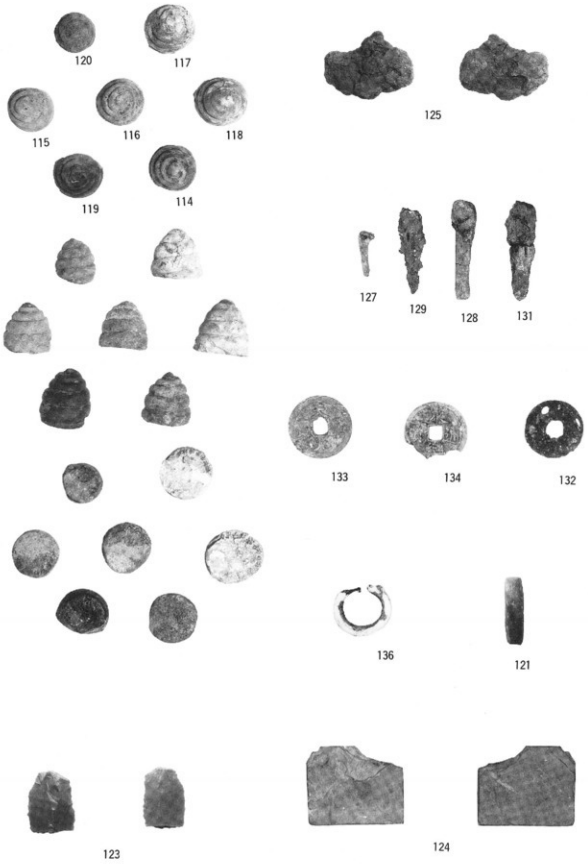


101



137

図版49　遺構に伴わない土器 (2) (1/3)



図版50　その他の遺物（132～136は2/3 他は1/2）

報告書抄録

ふりがな	はっとりはいじ
書名	服部廃寺
副書名	
巻次	
シリーズ名	長船町埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	2
編著者名	池田 浩・大谷博志・杉山一雄
編集機関	長船町教育委員会
所在地	〒701－42 岡山県邑久郡長船町土師291 TEL 086926－2633
発行年月日	西暦 1997年3月14日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
服部廃寺	岡山県 邑久郡 長船町 服部	33363		34° 42′ 24″	134° 6″ 45″	H3.3.15～ ～3.31 H.4.10.14 ～H.5.2.5 H.5.9.16 ～12.31 H.7.2.27 ～3.31 H.8.2.19 ～3.31	111㎡ 262㎡ 229㎡ 300㎡ 223㎡	確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
服部廃寺	寺院跡	白鳳時代～ 鎌倉時代	金堂跡、講堂跡 回廊跡、溝など	瓦、塼擅、土師器、 須恵器、鉄製品 （釘、轡金具）、 砥石	金堂須恵壇が良好に保存
	集落	旧石器時代 縄文時代 弥生時代 古墳時代	 竪穴住居、土壙 竪穴住居	ナイフ形石器 縄文土器 弥生土器 土師器、須恵器、 耳環	

服部廃寺

平成９年３月14日　印刷
平成９年３月14日　発行

編集・発行
長船町教育委員会
〒701－42
岡山県邑久郡長船町土師291
印刷　西日本法規出版株式会社